

京都橘大学 文化財調査報告 2009

牧野車塚古墳・禁野車塚古墳・向山古墳・大宅廃寺瓦窯跡・山科本願寺跡

2010年3月
京都橘大学 文学部

はじめに

本学の文化財学科は1996（平成8）年に設置申請し、同年12月に認可され、1997（平成9）年4月より開設された。その設置理由を当時の門脇禎二学長は「①文化財・伝統文化を尊重する心と専門的知識・技能の基礎を身につけて、研究者・職業人をめざしたり、あるいはすぐ社会生活に入る学生の育成と、②体系的な「文化財学」の創出をめざす研究の進展、を目的においた」とした。

そのうちの専門的知識・技能の基礎を身につける一環として、本学では2000（平成12）年3月から開始した京都市伏見区にある法琳寺跡の測量調査以降、発掘や測量調査を継続し、多くの学生が参加し、調査の方法を学んできた。それ以降、大阪府枚方市牧野車塚・禁野車塚古墳、京都市宮道古墳の測量調査、滋賀県大津市熊ヶ谷古墳群の発掘調査を実施してきた。その成果は本報告書のように年ごとに報告することにしている。そうすることで、毎年学生メンバーに入れ替わる各回生に調査から報告書作成までの一貫した流れを体感できるような環境にはなってきた。

こうした作業と勉学が行えるのは、ひとえに現地の調査にあたらさせていただく際の関係者の方々のご協力の賜である。そして、その成果を表す本書を作成するにあたっては、さらに多くの方々にお世話になった。今後ともこうした文化財調査についてのご理解、ご協力、ご指導を賜りますよう、お願い申し上げる次第である。

2010年3月31日

京都橋大学文学部

例　　言

1. 本書は、京都橋大学が2009年度に実施した大阪府枚方市牧野車塚・禁野車塚古墳、京都市山科区向山古墳・大宅廃寺瓦窯跡・山科本願寺跡土壘の調査報告と、その調査に関連した「山科盆地における瓦窯の配置－奈良・平安時代の集落・寺院と関連して－」と題する小論を掲載したものである。
2. 調査した遺跡と遺構には、国土座標世界測地系によってその位置を示した。
3. 本文の執筆は、第1章を一瀬和夫・堂ノ本智子、第2章を三井 彩、第3章を松井綾子、第4章を坂本聰美、第5・7章を松浦未春、第6章を山崎美輪があたった。
4. 本書の編集は、一瀬が担当し、各執筆者や参加学生がこれを助けた。
5. 調査にあたっては、大阪府教育委員会、枚方市教育委員会、財団法人枚方市文化財研究調査会、関西大学考古学研究室、京都府立大学考古学研究室、東京工業大学、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、京都市建設局水と緑環境部緑地管理課、淨土真宗本願寺派本願寺山科別院、小川裕見子、大竹弘之、西田敏秀、米田文孝、菱田哲郎、亀井宏行、北田栄造、堀 大輔、宇野隆志、左海資士、寺本義三、中村栄助、中川まさみ、山手重信、辻 修、河村 信、釋迦浩爾、奥村弥恵をはじめとする関係機関、諸氏諸嬢にご高配を賜った。記して感謝したい。

目　　次

はじめに・例言

第1章	2009年度の調査経過	1
第2章	牧野車塚古墳墳丘補足測量調査	3
第3章	禁野車塚古墳墳丘補足測量調査	10
第4章	向山古墳墳丘測量調査	14
第5章	大宅廃寺瓦窯跡地形測量調査及び窯体実測	19
第6章	山科本願寺跡土壘測量調査	25
第7章	山科盆地における瓦窯の配置 －奈良・平安時代の集落・寺院と関連して－	28

第1章 2009年度の調査経過

1. 2009年度の調査状況

今年度の現場作業は、まず7月より東京工業大学の地中探査に合わせて、大阪府枚方市の禁野車塚古墳の墳頂部の補足測量に入った。8月前半は同じく、枚方市の牧野車塚古墳の墳丘渡土堤の測量調査を行った。8月後半は本学付近に所在する山科区大宅向山の大宅庵寺瓦窯跡地形測量調査と向山古墳墳丘測量調査を実施した。なお、今年度の下半期には、3次に分けて実施しようとする山科本願寺跡土墨の測量の第1次調査も行った。実施の詳細は以下に記すとおりである。

夏期に行った調査の整理作業にあたっては、考古学実習の授業を中心に、堂ノ本智子、坂本聰美、松井綾子、松浦未春、三井 彩、池角 茜、今崎健太、酒井裕加、塙見良平、末光沙紀、瀬戸新太郎、田口五基、竹村亮仁、中山尚恵、森 勇人、森 英晃、山崎美輪、瀬尾友美、中島康佑、松村 真が行った。

2. 牧野車塚古墳墳丘補足測量調査

牧野車塚古墳は大阪府枚方市車塚1丁目に所在する。周囲に周濠・外堤を備えた禁野車塚古墳と並ぶ規模を誇る前方後円墳である。1922年に国史跡指定を受けている。2007年度の調査で全体の測量を20cmセンター、縮尺1/100で行い、墳丘長107.5m、後円部径58m、同高8.2m、前方部幅45m、同高6.5mとなり、築造時期が4世紀代にさかのぼることがわかった。2008年度には墳丘北側の渡土堤の可能性がある地域の測量を行い、渡土堤が存在することがわかった。

それに伴い、今年度は、墳丘南側に存在する渡土堤の可能性がある4ヶ所と古墳状隆起の確認のため、測量単位を細かくして10cmセンター、縮尺1/50で行った。併行し、枚方市で出土した埴輪の実測も報告書作成に向けて行った。調査は関西大学・京都橘大学・京都府立大学・財団法人枚方市文化財研究調査会の4者を中心とした実施した。

本学からは、調査主任を巽淳一郎・一瀬和夫・西田敏秀として、2009年8月3日から12日、10月10・11日の2回に分けて現地にて実施した。

本学の参加者は、堂ノ本智子、坂本聰美、日置舞子、

松井綾子、松浦未春、三井 彩、池角 茜、塙見良平、末光沙紀、田口五基、竹村亮仁、森 英晃、山崎美輪、荒木瀬奈、伊藤あかね、伊藤智子、岡本知里、五反田健、澤 亮佑、白倉淳也、竹内優子、鳥越祐江、中島康佑、原田 遼、松村 真、山田菜々恵、東條良明、大下和希、高原頌太、岡本真央、齋藤神奈である。

3. 禁野車塚古墳墳丘測量調査

禁野車塚古墳は大阪府枚方市官之坂5丁目に所在する。天野川に向かって西方に張り出す北河内で屈指の規模を誇る前方後円墳である。1972年に国史跡指定を受けており、2006年の範囲確認調査で古墳築造時期がさかのぼる可能性が出てきたため、2008年に全体の測量を行った。20cmセンター、縮尺1/100で行った結果、墳丘長120m、後円部径63m、同高9m、前方部幅55m、同高3.4mとなった。また、墳丘頂が南北に楕円形を呈し、スロープの存在も明らかになった。築造時期も4世紀初頭もしくは3世紀代にさかのぼることがわかった。

今年度はその補足調査と、特にその後の探査の結果、後円部墳頂部に方形壇が存在する可能性があることから日程を合わせて、10cmセンター、縮尺1/50で測量を行った。調査は関西大学・京都橘大学・京都府立大学・財団法人枚方市文化財研究調査会の4者を中心とした実施した。

本学は、調査主任を巽淳一郎・一瀬和夫・西田敏秀とし、2009年7月11・12日、7月30・31日、10月10・11日の3回に分けて現地にて調査を行った。なお、併行して地中探査を東京工業大学が行っている。

本学の参加者は、堂ノ本智子、山田昌恵、江藤 梓、坂本聰美、松井綾子、松浦未春、三井 彩、村井智子、山崎 宙、森 英晃、荒木瀬奈、白倉淳也、中島康佑、原田 遼、松村 真、東條良明、大下和希、高原頌太である。

4. 向山古墳墳丘測量調査

向山古墳は京都市山科区大宅向山に所在する。丘陵突端部に位置し、径10mの円墳と推定されている。竹藪の中に存在しているが、詳しい墳丘測量図が存在せず、1976・1981・1982年の橘女子大学考古学研究会の踏査記録を残すのみである。そのため、現状を記録し、古墳の範囲の特定のため、その墳丘状隆起の測量調査を行った。また、墳丘上には石が散乱しており、それが古墳とする根拠になったと思われる。そのため今回も同時にその墳丘上の礫石の現状実測も行った。

調査は、調査主任を巽淳一郎・一瀬和夫とし、2009年8月17日から28日に現地にて実施した。

現場参加者は堂ノ本智子、坂本聰美、松井綾子、松浦未春、三井 彩、田口五基、竹村亮仁、山崎美輪、荒木瀬奈、伊藤智子、福田早祐、柿添康平、川端優太、北村

純、澤 亮佑、瀬尾友美、高橋亜希、中島康佑、西由香里、森原智歩、山田菜々恵、岡本真央、大下和希、高原頌太である。

5. 大宅廃寺瓦窯跡地形測量調査

大宅廃寺瓦窯は京都市山科区大宅向山に所在する。竹藪の中に1基の窯の焼成部後部が観察できるものである。1985年に京都考古学研究会が調査を行い、地形測量と断面実測、窯体の実測を行っている。

この窯の現状と、立地の構造、そしてセットとなるような近接する窯が存在するか否かを検討するために、2008年に地形測量と断面実測を行った。今年度は前年に引き続き、地形測量及び窯体実測を行った。その周囲にも近接して瓦窯の存在する可能性が高いため、測量範囲をさらに南北に広げて行った。

調査は調査主任を巽淳一郎・一瀬和夫とし、2009年8月17日から28日に現地にて実施した。

現場参加者は堂ノ本智子、坂本聰美、松井綾子、松浦未春、三井 彩、田口五基、竹村亮仁、山崎美輪、荒木瀬奈、伊藤智子、柿添康平、川端優太、北村 純、澤



写真1 牧野車塚古墳 調査地2 渡土堤F 調査風景



写真3 山科本願寺跡土壘 調査風景

亮佑、瀬尾友美、高橋亜希、中島康佑、西由香里、福田早祐、森原智歩、山田菜々恵、岡本真央、大下和希、高原頌太である。

6. 山科本願寺跡土壘測量調査

山科本願寺土壘跡は京都市山科区西野阿芸沢町、西野様子見町、西野大手先町に所在する。1478（文明10）年に蓮如上人によって建設が開始され、1532（天文元）年に焼失した。現在、土壘・堀跡のみが数ヶ所残る。今年度測量を行ったのは、山科本願寺の北東、内寺内町と外寺内町を区切る土壘で、山科中央公園内に存在する。この地点のものは最も残りがよいことから、2002年に国史跡指定を受けている。この土壘の構造の現状を詳細に記録し、よりよく知るために、25cmセンター、縮尺1/100で測量を行った。この調査は、今回が第1次調査で、2009年から2011年にかけて行う予定である。

調査は、調査主任を巽淳一郎・一瀬和夫とし、2009年12月22日から29日、2010年1月4日から6日に現地にて実施した。また、1月4日にはラジコンのヘリコプターによる写真撮影を行った。

現場参加者は堂ノ本智子、坂本聰美、松井綾子、松浦未春、三井 彩、今崎健太、竹村亮仁、山崎美輪、荒木瀬奈、中島康佑、林 伸明、原田 遼、松村 真、岡賢志、岡本真央、齋藤神奈、八軒かおり、村岡瑞穂である。



写真2 向山古墳 石群 調査風景



写真4 山科本願寺跡土壘 調査風景

第2章

牧野車塚古墳墳丘 補足測量調査

1. はじめに

牧野車塚古墳は、大阪府枚方市車塚1丁目に所在する。周囲3方向を穂谷川、淀川、天野川に囲まれており、標高22m余りの交野台地の北西部に當まれた前方後円墳である。1922年国史跡として指定されており、現在周囲は公園として整備されている。築造時期は、古墳時代中期前半（5世紀前半）と考えられてきたが、2004年度の調査によって古墳時代前半（4世紀後半）以前にさかのぼることが確実になった。周囲に周溝・外堤を備え、西に後円部、東に前方部を配し、墳丘長107.5m、後円部径58m、前方部幅45mを測る。外堤を含めた規模は北河内地域最大で、その原型は十分に保たれている。

2. 既往の調査

牧野車塚古墳墳丘本体の発掘調査は、1978年の第1次調査と2004年の第2次調査のみであった。

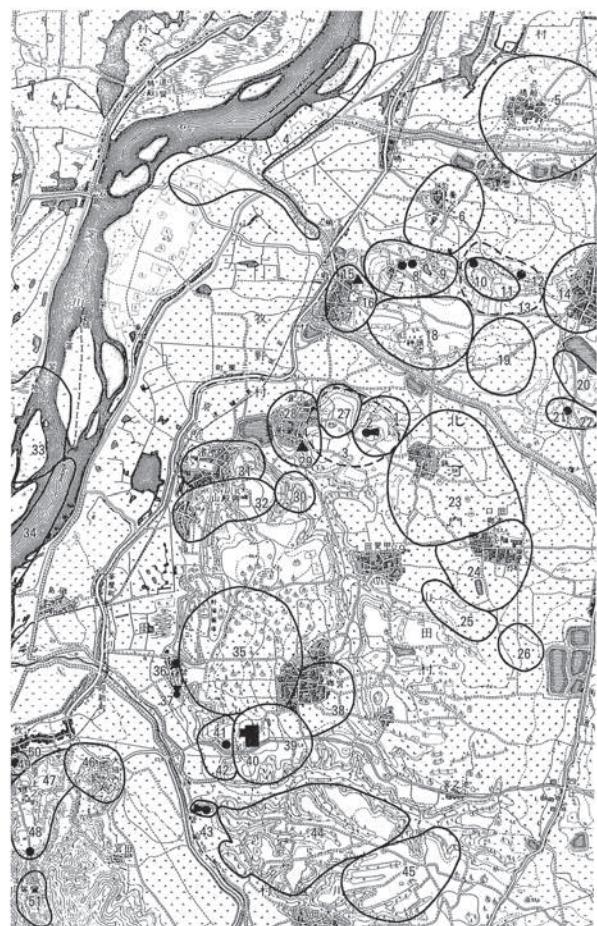
第1次調査では後円部西側外堤隣接地で実施され、外堤に沿う形で溝状遺構が検出された。その溝の中からは2個体分の円筒埴輪が約10cm間隔で並んで検出されたが、詳細は不明である。第2次調査は前方部墳丘と周溝で実施された。この調査では墳丘部より板石が小口積みにされるという特殊な葺石が検出された。また、周溝の形より、墳丘の鍵穴形がわかるとともに、出土した鰐付円筒埴輪などから見て、それまで5世紀前半と考えられてきた築造時期が少なくとも4世紀にはさかのぼると考えられた（1）。

これまでの牧野車塚古墳の測量図は、1966年の枚方市史編纂事業として行われたものと、大阪府教育委員会事業として奈良国立文化財研究所（現、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所）が実施したものがあったが、いずれも1mセンターでの作成であったため、詳細な測量図はなかった（2）。そこで2007年度、本学と関西大学、京都府立大学及び財団法人枚方市文化財研究調査会の4者が牧野車塚古墳研究調査團を組織し、20cmセンター、縮尺1/100での平板測量と、トータルステーションによる測量調査を行った（3）。

その結果、後円部南側を除いて二段築成であった可能

性が高いこと、従来外堤とされていた部分にあたる後円部南東に方形状の、前方部南東に円形状の小規模な墳丘状隆起が存在することがわかった。さらにくびれ部両側、後円部北西に渡土堤と思われる高まりが確認できた。

翌2008年度の補足調査に伴い、後円部と後円部南側にある円墳と思われる高まりについて東京工業大学がレーダー等の地中探査もあわせて行った。そうした古墳状隆起とともに、2007年度の調査の際に古墳の北側に4箇所で渡土堤と考えられる高まりの可能性があったことから、補足調査の際にその1箇所で地中レーダー探査を行った。その結果、渡土堤の高まりの可能性が強まるとともにその周囲に堆積層があまりないことがわかった。



- 1 小倉東遺跡 2 牧野車塚古墳 3 牧野平塚古墳群 4 淀川河床遺跡
5 船橋遺跡 6 養父遺跡 7 宇山1号墳 8 宇山2号墳 9 宇山遺跡
10 養父古墳 11 養父丘遺跡 12 北丘尼塚古墳 13 養父古墳群
14 招提寺内村遺跡 15 牧野阪瓦窯跡 16 牧野阪古墳 17 牧野阪遺跡
18 九頭神遺跡 19 招提中町遺跡 20 招提今池遺跡 21 日置山古墳
22 日置山遺跡 23 交北城の山遺跡 24 田口中島遺跡 25 甲斐田新町遺跡
26 出屋敷西遺跡 27 小倉遺跡 28 アゼクラ遺跡 29 粟倉瓦窯跡
30 渚東遺跡 31 渚遺跡 32 御殿山遺跡 33 前島遺跡
34 淀川河床遺跡（その2） 35 禁野本町遺跡 36 白雉塚古墳
37 禁野上野古墳 38 中宮尼寺田遺跡 39 百濟寺遺跡 40 百濟寺跡
41 注具ドンバ墳丘墓 42 中宮ドンバ遺跡 43 禁野車塚古墳 44 星丘西遺跡
45 星丘遺跡 46 岡東遺跡 47 枚方上之町遺跡 48 枚方小学校南方古墳
49 万年寺山古墳 50 万年寺山遺跡 51 鷺塚山遺跡

図1 牧野車塚古墳の周辺遺跡分布（『小倉東遺跡』Ⅱより）

このことは現状地形を測量することによって、発掘調査であらわにした旧表面を図化することに等しい成果を得ることが想定できたため、同年さらに縮尺1/50、10cmコンターで北側の渡土堤状隆起の測量を行い、以下のことを把握することができた。

すなわち渡土堤状のものを経由して、後円部側と前方部側で高低差をもつこと。渡土堤の中心と周溝底では相互の地形に違いが出ること。渡土堤が墳丘からゆるやかに下った後、外堤側に再度のぼっていくこと。渡土堤がある位置は外堤側からも墳丘へとのびるような突出した地形になること、といった4点である。

3. 南側渡土堤詳細測量の所見

さて、本年度は昨年度の古墳北側の渡土堤の測量に引き続き、古墳南側において渡土堤の可能性のある場所と古墳の可能性のある隆起を10cmコンター、縮尺1/50での測量を行った。今回測量を行った調査範囲は、後円部側の西から前方部側の東に向かって、前年度と混同を避けるためにそれぞれ順に調査地1、調査地2、調査地3、調査地4、調査地5とした(図2)。

調査地1は東西27m、南北21m(図3)、調査地2は東西21.5m、南北23.5m(図3)、調査地3は東西19m、南北24m(図4)、調査地4は東西18.5m、南北20.5m(図4)、調査地5は東西26.5m、南北19m(図5)の範囲を測量した。

調査の結果、調査地2と調査地5で渡土堤が確認できた。昨年度の渡土堤A～Dに続き、調査地5のものを渡土堤E、調査地2のものを渡土堤Fとした。また、他にもともと渡土堤であった可能性がある大きな段差が3箇所ある。調査地1のものを段差a、調査地2・3のものを段差b、調査地4のものを段差cとした。

調査地1の最も低い周溝底はT.P.21.83m、調査地2の最も高い周溝底の高さはT.P.24.63m、渡土堤Fの高さは西側で少なくとも2.3～2.8m、東側で0.7m、調査地3の周溝底はT.P.23.80mである。調査地5の西側周溝底はT.P.22.006m、東側はT.P.21.88m、渡土堤E中央の高さT.P.22.036mであり、渡土堤の高さは西側で0.03m、東側で0.156mであった。高低差だけでは分かりづらいが、前方部側辺がふくらむことで渡土堤とすることであろう。以下に段差A～Cも含めて詳しく述べることにする。

渡土堤Fの西側コンターラインから調査地1の周溝付近までは2.8mほどの高低差がある。

調査地1の周溝から調査地2に向けての高まりは渡土堤Fに続くものと考えられる。

渡土堤Eは幅1.9m、長さ7.20mである。調査地3には中央部に落ち込みが確認できた。これは当初、後世の攪乱のように思えたが、東側に渡土堤を設け、墳丘側にテラスを作ろうと部分的に掘削しようとした際のものである可能性も考えられる。



図2 牧野車塚古墳 墳丘測量図と詳細測量地区配置図 (A～D=2008年度、1～5=2009年度)



写真5 牧野車塚古墳 調査地1（北東より）



写真6 牧野車塚古墳 調査地1 段差a（北東より）



写真7 牧野車塚古墳 調査地2 渡土堤F（南東より）



写真8 牧野車塚古墳 調査地3 段差b（北西より）



写真9 牧野車塚古墳 調査地3 段差b（東より）



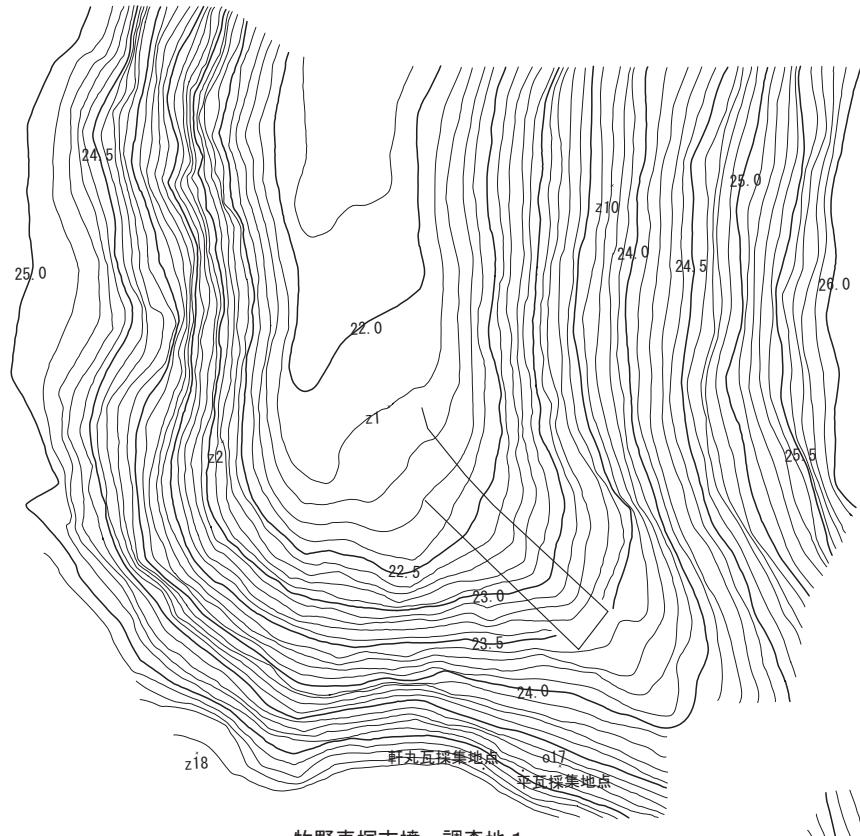
写真10 牧野車塚古墳 調査地4 段差c（東より）



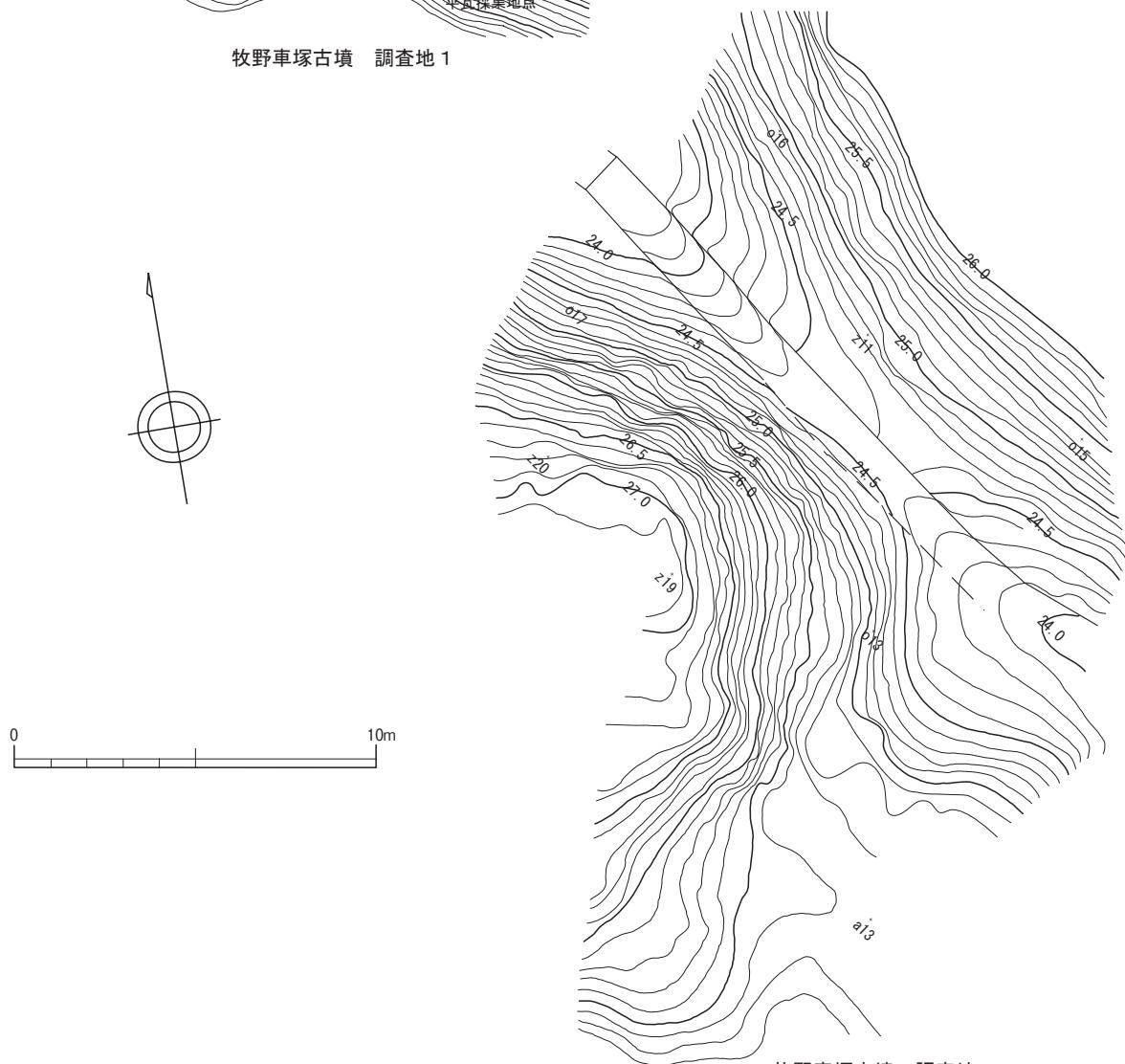
写真11 牧野車塚古墳 調査地4・5の間（東より）



写真12 牧野車塚古墳 調査地5 渡土堤E（東より）

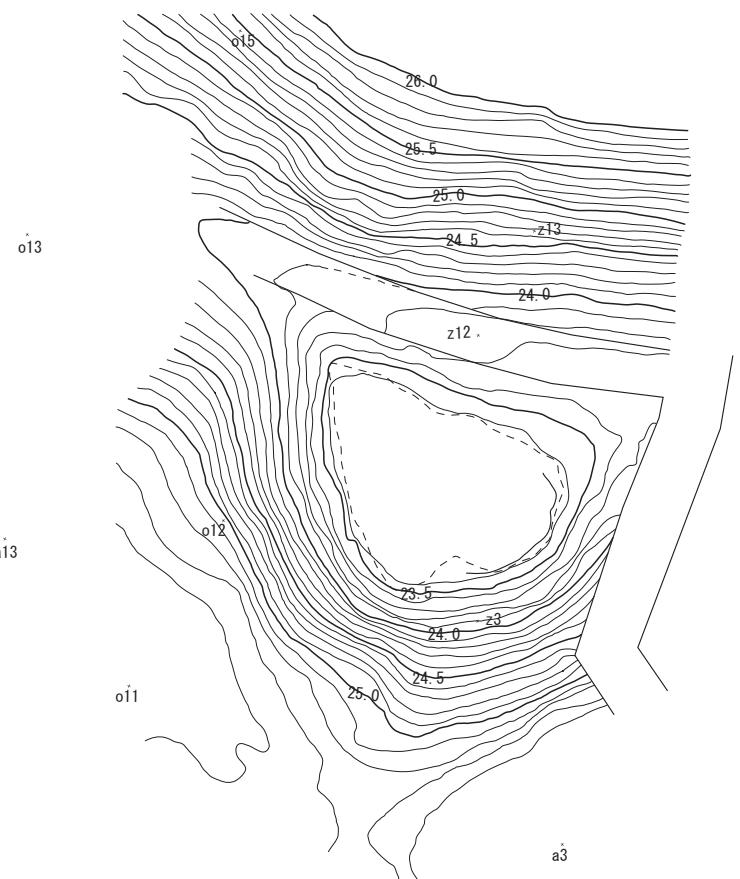


牧野車塚古墳 調査地 1

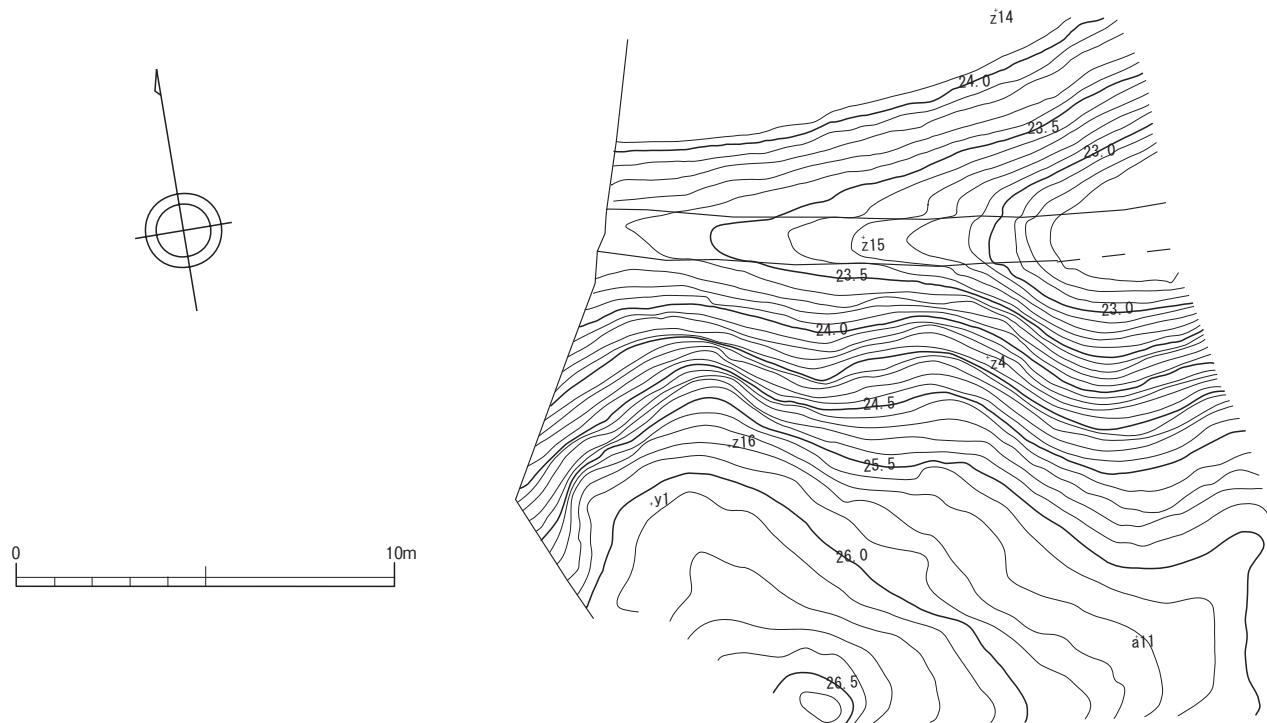


牧野車塚古墳 調査地 2

図3 牧野車塚古墳 調査地1（段差a）、調査地2（渡土堤F、段差b）



牧野車塚古墳 調査地 3



牧野車塚古墳 調査地 4

図 4 牧野車塚古墳 調査地 3 (段差 b)、調査地 4 (段差 c)

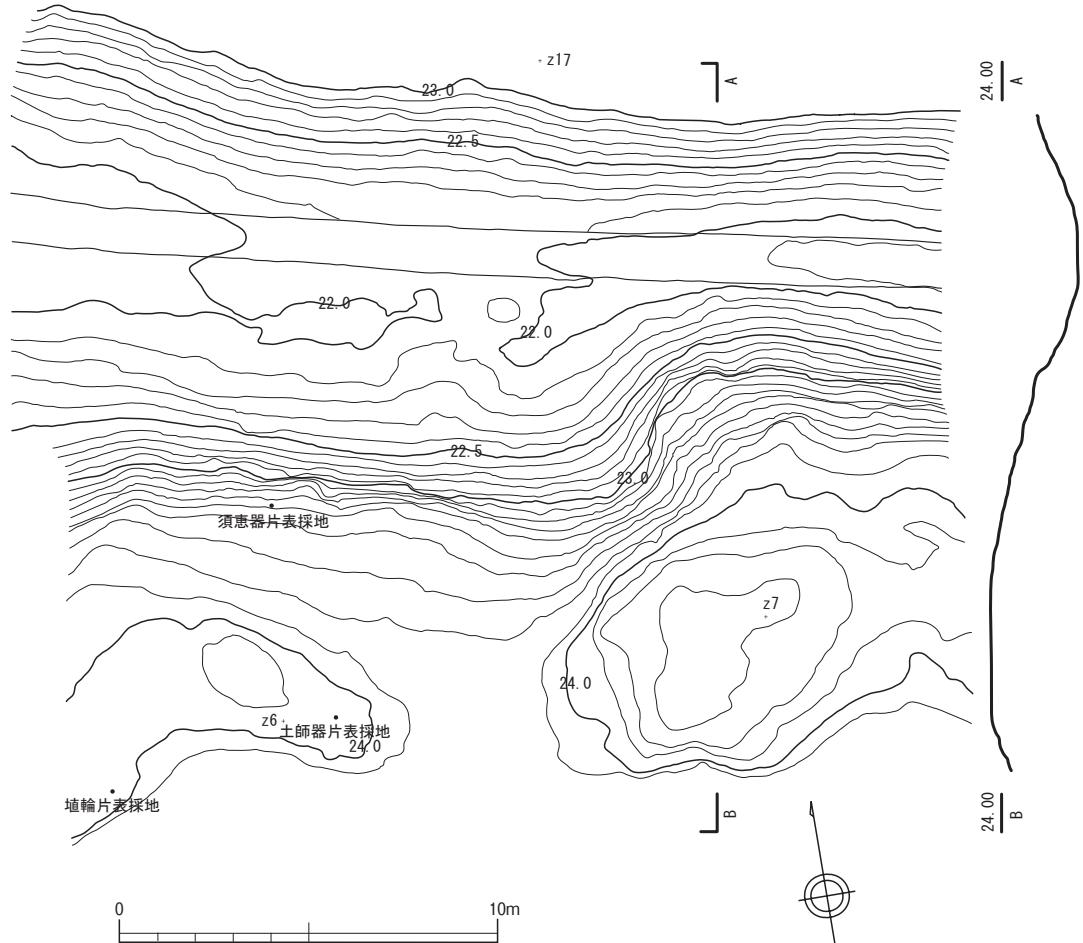


図5 牧野車塚古墳 調査地5（渡土堤E）

調査地4では東側に比べて西側の幅が狭くなっている。また、道付近のコンターラインは西側ではゆるやかだがT.P.23.10m以下は段がついて50cmほど一気に下がる。

調査地5は西側周溝に比べ東側周溝のコンターラインが一本多く回っており、東側の周溝の方が深いことがわかる。

渡土堤Eは東側ではT.P.22.00m辺りで落ち着いている。よって渡土堤の最も高い部分であるT.P.22.036mからT.P.22.006mまで、高さを0.03mとした。西側はT.P.21.90m辺りで落ち着くためT.P.22.036mからT.P.21.88mまで、高さを0.156m。上幅は1.90m、上場と下場間の距離を斜面長とし、西側を1.30m、東側を1.50mとした。長さはT.P.22.398m付近からセンターにたわみが見られるT.P.22.30m付近までとし7.20mとした。渡土堤Eの東側よりも西側の方が0.12mほど深くなっていることがわかる。

渡土堤Fは西側では調査地1のT.P.22.30m辺りまで続いている。よって、高さはT.P.24.63mからT.P.22.30mまででは2.30m。東側ではT.P.23.90m辺りで

落ち着く。よって高さは渡土堤中央のT.P.24.60mからT.P.23.90mまでで0.70mとなる。T.P.24.50m付近でセンターがまわらず平坦になるため、これを渡土堤の上部とし、上幅を5.70m、長さを2.40mとした。上場と下場間の距離を斜面長とし、西側を12.40m、東側を5.70mとした。

段差aはT.P.22.30mから斜面が急になり始めT.P.25.10mで緩やかになる。そのため段差2.80m、斜面長7.10mとなる。

段差bは落ち込みの際からはじまりT.P.24.70mでゆるやかになる。したがって段差はT.P.24.70mからT.P.23.337mを引き1.363m、斜面長3.40mとなる。

段差cは東側のT.P.22.70m辺りからはじまりT.P.23.70m辺りでゆるやかになる。よって段差1.00m、斜面長11.00mとなる。

このような方法で去年確認した渡土堤A～Dの数値も求め、その一覧を表1に示した。

今回の調査で、調査地2、調査地5の渡土堤、調査地1、調査地2・3、調査地4の段差を詳細に知ることが

できたことになる。

昨年度の調査結果と合わせると、西の後円部背面から渡土堤Aと渡土堤F、調査地3の落ち込みが渡土堤を設けるためのものと考えれば、調査地4の高まりが渡土堤Bとくびれ部後円部で対象になると考えられる。また、くびれ部前方部側渡土堤Cと渡土堤Eはほぼ対象に位置していることがわかる。ところで、今回の調査地ではないが、渡土堤Dの対象になる可能性のある高まりが南東側に存在する。しかし、この部分はかつて掘削と盛土によって墳丘が損傷を受けた部分であり、確証は得られない。周溝底の高さからみて前方部前面とは段差があるため、当初は存在していたと見られる。さらに前方部前面にも後円部背面の渡土堤Fと対応する可能性のある高まりも存在する。

のことから、牧野車塚古墳では少なくとも6つの渡土堤を確認することができ、北側のBとDとで南側に対象して存在する渡土堤の可能性を見出すことができた。牧野車塚古墳と他の渡土堤を設けた古墳とを全体的にも比較できる新たな可能性を考える資料を提示することができたと言える。

表1 牧野車塚古墳の渡土堤及び段差の計測数値 単位(m)

	段差		高さ		幅 上	斜面長		長さ
	西	東	西	東		西	東	
渡土堤A			0.389	0.449	6.5	2.1	2.7	7.5
渡土堤B			0.223	0.201	1.5	1.5	1.5	5.2
渡土堤C			0.216	0.8	1.5	3.6	8.2	5.3
渡土堤D			1.039	1.122	3.5	2.9	2.5	4
渡土堤E			0.156	0.03	1.9	1.3	1.5	7.2
渡土堤F			2.3	0.7	5.7	12.4	5.7	2.4
段差a		2.8				7.1		1.5
段差b		1.363					3.4	10.5
段差c	1						11.0	12.7

注

- (1) 財団法人 枚方市文化財研究調査会『史跡 牧野車塚古墳第2次調査』2005年
- (2) 枚方市史編纂委員会『枚方市史』第1巻 1967年
- (3) 京都橋大学「牧野車塚古墳墳丘測量調査」『京都橋大学 文化財調査報告書2007』2008年

参考文献

- 京都橋大学「牧野車塚古墳墳丘測量調査」『京都橋大学 文化財調査報告書2007』2008年
京都橋大学「牧野車塚古墳墳丘補足測量調査」『京都橋大学 文化財調査報告書2008』2009年

第3章

禁野車塚古墳墳丘 補足測量調査

1. はじめに

禁野車塚古墳は大阪府枚方市宮之阪5丁目に所在する。北西方の淀川に流れ込む天野川に面した低位段丘上にあり、天野川に向かって西方にはりだす舌状微高地の先端部に立地する。西に面した前方部をもつ墳丘長約120mを測る前方後円墳である。墳丘は北河内では屈指の規模を誇り、1972年に国史跡指定を受ける。

築造時期について奈良県桜井市箸墓古墳に墳丘が類似するとも評されたが、その後、低地にあることから、長く5世紀代におけるいた。2004年度の調査の出土埴輪により、4世紀代という評価が多数を占めるようになっ

た。しかし、年代はまだ確定的と言えるものではなかった。

そのため昨年度の調査において、関西大学・京都橘大学・京都府立大学・財団法人枚方市文化財研究調査会の4者を中心に結成した淀川流域前期古墳研究調査団によって再度調査を試みた。

これまでの既存の墳丘測量図は1966年に市史編纂事業に伴ったものがあるが、墳丘長約110mを測る二段築成の前方後円墳として『枚方市史』に所収される（1）。ただし、その測量図は1mセンターであったため、昨年度に20cmセンターによる平板測量図及びトータルステーションを用いたデジタル測量図の2種類を作成した。平板測量と併行して東京工業大学による地中レーダー探査も行われた。今回の調査は、2008年に完成した全体の測量図の補足調査と、後円部墳頂に方形壇が存在する可能性があることから後円部墳頂平坦面を中心に10cmセンター、縮尺1/50での平板測量による方形壇の確認を行った。

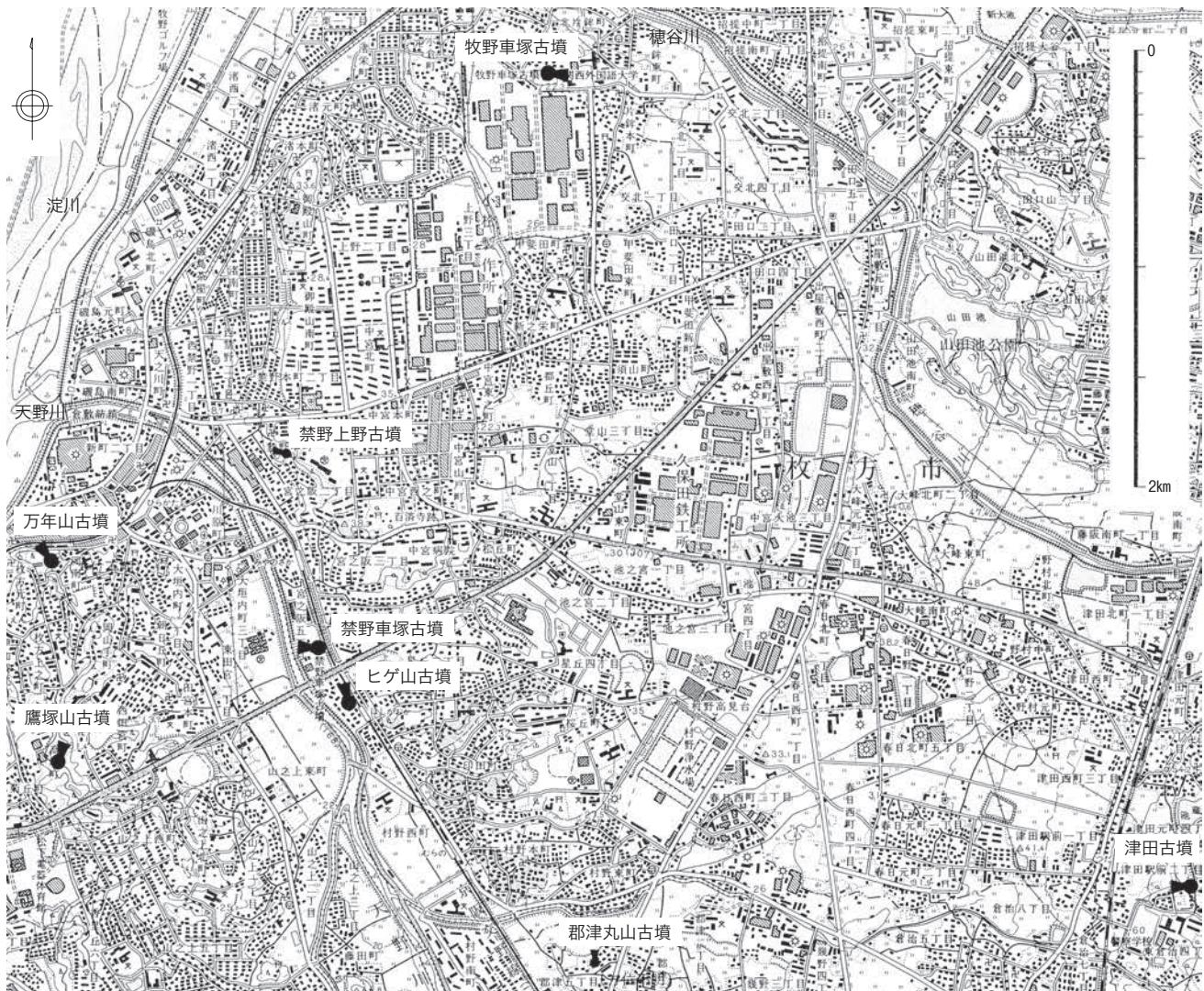


図6 穂谷川、天野川下流の前方後円墳の分布



写真13 禁野車塚古墳
後円部頂（西より）



写真14 禁野車塚古墳
後円部（東より）



写真15 禁野車塚古墳
後円部（東南東より）

2. 2008年度の調査

2008年8月4日から8月11日、9月8日、10月17日に行った調査では、世界測地系に基づく基準杭をもとに東西125m、南北76m、9,500m²の範囲を測量した。その結果、墳丘長120m、後円部径63m、同高9m、前方部幅55m、同高3.4mとなった。また、20cmセンターによる平板測量及びトータルステーションを用いたデジタル測量により、以下のような特徴が得られた。

墳丘は天野川につきだす微高地状の平地形に立地する他以下のような特徴がある。

後円部南東側裾に露出する崩面観察ではブロック土を多く含んだ土層が一様に認められる。このことから墳丘の上半分は盛土で作られていることがわかる。

墳丘頂は南北方向の楕円形を呈し、その範囲の下に主体部の存在が考えられる。

後円部は西側前方部の方向にとがる卵形を呈する。

墳丘頂はくびれ部にかけて明瞭なスロープがある。

後円部裾はくびれ部付近で正円形の軌道から外側にはずれ、明瞭に屈曲せずに前方部へゆるやかに続いていく。

前方部の幅がくびれ部で最も狭くならずに、その部分

はくびれ部より前方部前面側によっている。

前方部側辺の輪郭は内側にゆるく弧状を呈し、総じて細長い撥状の前方部となる。

こうしたことがらの中でも、径22mの後円部墳頂楕円形の平坦面には方形壇があるのではないかという可能性も考えられるようになってきた。また、そのうち2008年度に行った前方部とくびれ部北側の測量を再度、精度を上げて追加補足した。

この度は、そのうちの後円部墳頂部の測量結果について詳しく報告する。

3. 測量調査の所見

今回の調査では、前年度同様、世界測地系に基づく基準杭をもとに墳頂部平坦面とその周辺の調査をした。

前回の調査で判明した「墳丘頂は南北方向の楕円形を呈し、その範囲の下に主体部の存在が考えられる」としたもののはうに、方形壇と思われる地形が見てとれるような状況であったため、その確認を行った。今回は10cmセンター、縮尺1/50での平板測量を行い、その結果、以下のような特徴が見られた。

平坦面中央にある搅乱の様子から、盜掘坑と思われる

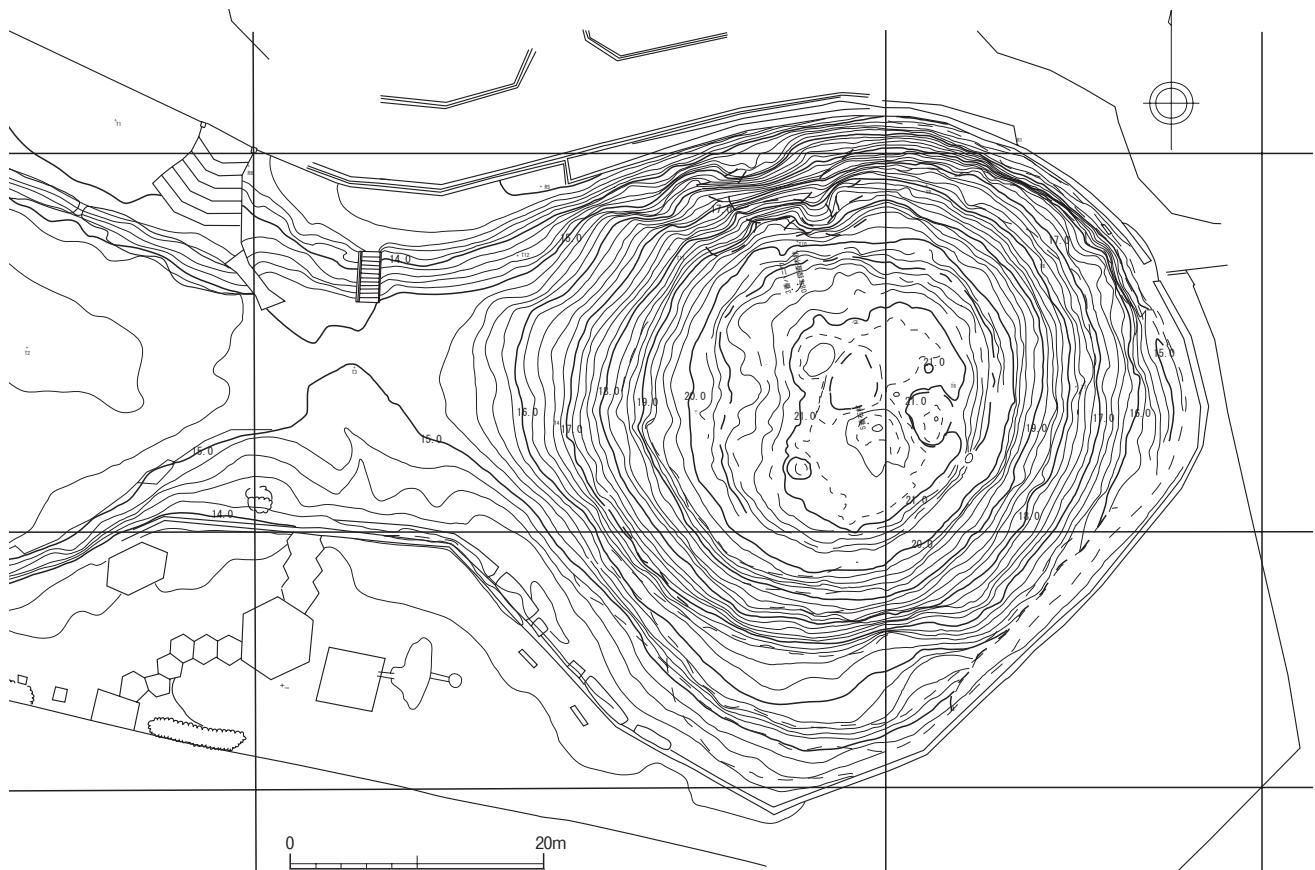


図7 禁野車塚古墳 後円部測量図

落ち込みとその上げ土状隆起2箇所を確認した。

方形壇としては不明瞭であるが、代わりに十字形の壇と思われるものが確認できるとともに、墳頂部平坦面西に扇状の地形の崩れらしきものも確認できそうである。

東京工業大学によって行われた地中レーダー探査による結果、所見は以下の通りである。

北西側へのコの字状の突出部や北東側への突出部は、現在の地形にもその痕跡が見られ、標高21mの等高線もそのような凹凸を描いている。古墳由来の構造として考えられるのは、祭祀のための基壇で、北西と北東に突出する形を持つ。南側にはその祭壇の痕跡を示すレーダー像は得られていないが、対照性を考えれば、十字形の祭壇が想像できる。北西に延びる幅3mの2本の直線構造は、祭壇への入り口（登り口）が設けられていることを示唆している（図8）、（2）。

これと今回の測量結果とが一致するのは、十字形の祭壇が見られるということである。「北東部・北西部で何らかの人工的な構造物がコの字状に並んでいる」というのは、レーダーだけでなくコンターラインにも現れてきているため、方形ではない十字形の隆起が地表面にも反映されている。しかし、「北西に延びる幅3mの2本の直線構造は、祭壇への入り口（登り口）が設けられてい

ることを示唆している」に関しては、多少疑問が残る。すなわち、その位置については、前方部から伸びたスロープの位置を考えると西に寄りすぎているように感じる。また、コンターラインを見ると、北西方向には盛土が見られ、中心部から外側にかけて扇状に広がっている。この形状から推測できるのは、中心部の落ち込みの土や石材を北西部へよけた可能性も考えられるのではないか、ということである。落ち込みが盗掘坑だとすれば、その際、まず北西部に掘った土を盛り、次に落ち込み東側に土を盛った、という動きが平坦面搅乱の様子と一致する。その際、主体部の石が土とともに出土していたとすれば、レーダーへ映りこんだものは祭壇への入り口であるとは言い切れなくなってくる。

また、落ち込みの形状と搅乱上げ土の位置と思われる範囲の搅乱部をとりのぞくと、南北方向の高まりもあり得る。主体部の向きも、やはり、南北を向いていた可能性も否定しきれないのではなかろうか。

4. おわりに

今回の調査の結果、方形壇を南北方向であるとすれば、それともとれる地形が見てとれたのは墳頂部西側の一角のみであった。しかし、測量図から明瞭な基壇を指し示すことはできなかった。その地形から、十字形状と思われる地形が崩落の激しい東部以外の3方位で見られ、十字形状の基壇がそこにあったことも予測することもできる。今後、墳頂部状況を探るさらなる検討を加えていきたい。

注

- (1) 枚方市史編纂委員会『枚方市史』第1巻 1967年
- (2) 亀井宏行「禁野・牧野車塚古墳の調査」『歴史シンポジウム 交野ヶ原の前期古墳』枚方市教育委員会 2009年

参考文献

- 京都橘大学『京都橘大学 文化財調査報告2008』2009年
一瀬和夫・亀井宏行他『歴史シンポジウム 交野ヶ原の前期古墳』枚方市教育委員会 2009年

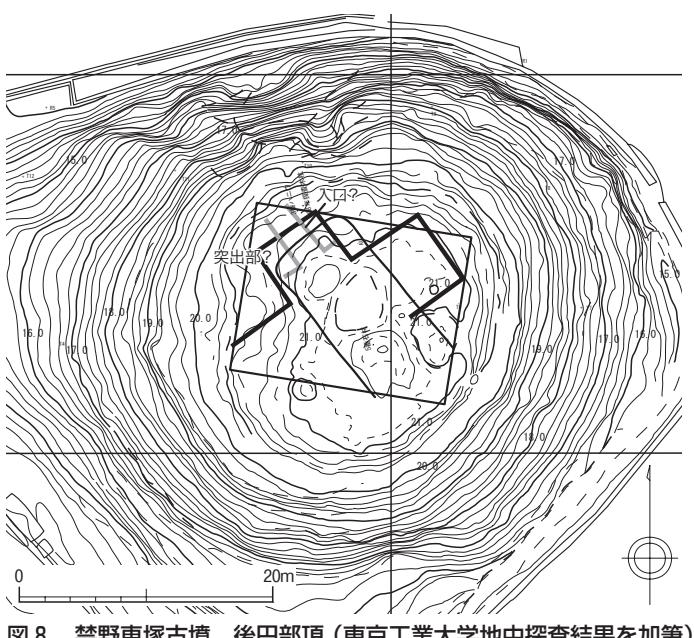


図8 禁野車塚古墳 後円部頂（東京工業大学地中探査結果を加筆）

第4章 向山古墳墳丘測量調査

1. 歴史的環境

向山古墳の位置する山科盆地は京都府の東、京都盆地と稻荷山を1つ隔てた東側に存在する。山科盆地は南北に細長い長方形をなすが、東側を音羽・醍醐山地、北側を比叡山山地、西側を東山・桃山丘陵に囲まれ南側がやや広がった地形となっている。この盆地の古墳のほとんどが古墳時代後期、6～7世紀に入ってから盛んに築造されるようになった。現在、確認されている古墳の総数は70基以上を数えるが、その大半は旭山古墳群・醍醐古墳群・中臣十三塚古墳群が占めている。他に昨年、本学で調査した宮道古墳、今回調査した向山古墳などが含まれる。

京都市山科区大宅向山町に所在する（図9）。向山古墳の周囲には古墳や寺院などが存在する。北側には大宅廃寺・大宅廃寺瓦窯跡・大宅古墳が存在している。大宅廃寺瓦窯跡は奈良時代前期の窯跡であり、今回も調査を行った。大宅古墳は古墳時代後期のもので、扇状地に立

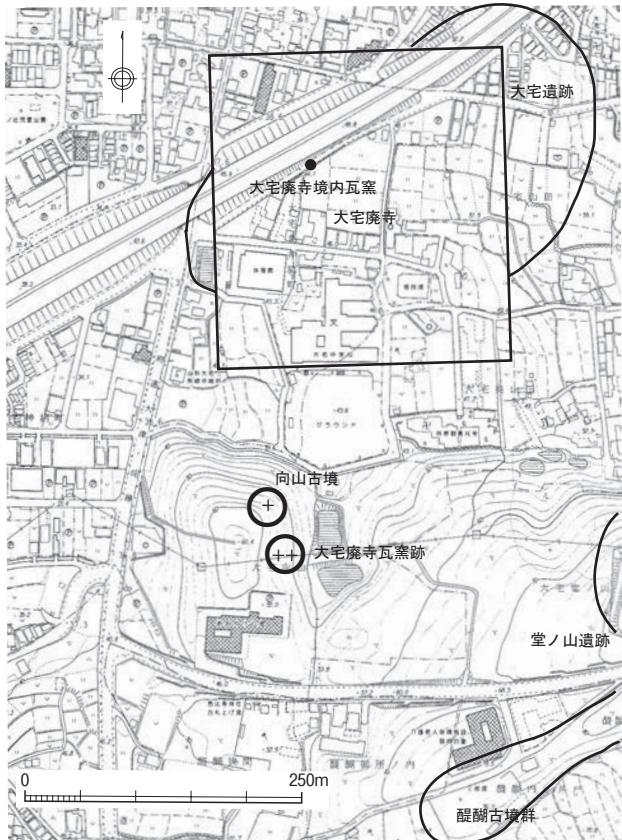


図9 向山古墳、大宅廃寺瓦窯跡位置図

地しており、径13mの横穴式石室をもつ円墳である（1）。石室基底から6世紀末～7世紀前半の須恵器・平瓶・金環・人骨片などが出土する。南側には醍醐古墳群が存在している。山科盆地の南端に存在している醍醐古墳群は、耳塚と呼ばれる1号墳のみが円墳であり、他はすべて方墳で構成される古墳時代後期の群集墳である。最も大きい1号墳は直径25mで、高さ3mの規模である。他の方墳は一辺5～12mの規模をもっている。1号墳は6世紀後半、その他は7世紀初頭と考えられる。

2. 既往の調査

南北を古墳にはさまれた環境にある向山古墳は、これまでに、詳しい調査はされていないが、橋女子大学考古学研究会により1976年と1981年、1982年に踏査がされている。これによると、古墳時代後期の円墳であり、直径は10mとしている（2）。古墳である理由として、標高58mの丘陵で、尾根上に位置し、北東側は崖状になった尾根突端の見晴らしの良い場所にある。墳丘上に葺石かと思われる割石が多数散乱し、少し台状になっており、割石が多数散在していたこと、同時に墳頂部らしき部分に石が径0.7～0.8mくらいの環状をなしていたことをあげている。また、墳丘の裾と思われる所には段があり、2段か3段築成としている。

3. 調査の概要

これまで、この向山古墳についての詳しい墳丘測量図が存在せず、踏査記録しか残されていなかったため、今回現在の地形状況を記録するために、測量調査を行うことになった。2009年8月17日から28日に現地にて平板を使用し、地形測量調査と石群の平面実測をした。

測量は墳丘である可能性を配慮して、20cmセンター、縮尺1/100にした。基準点は、世界測地系に基づいて3ヶ所に配置し、それを元に新たな点を2ヶ所、追加設置した。墳丘北側に置いた基準点K1はX=-114719.643、Y=-16342.663、高さ58.957m、墳丘の中央に置いた基準点K2はX=-114724.897、Y=-16343.919、高さ59.162m、墳丘南側に置いた基準点K3はX=-114734.475、Y=-16336.125、高さ57.223mである。測量した範囲は、北東は崖面まで、北西は大きな搅乱まで、南西は尾根頂部結束箇所までを対象とし、南北26m、東西23mとなった。

墳丘状隆起は、丘陵の突端部頂に位置しており、北東側を中心にして崖となっている。北西側の崖下には段が

1つあり、下に平坦な部分があることから、この崖下は一部竹の子栽培のために使われる。墳丘状隆起での径は、従来のデータでは径10mとされていたが、今回の調査で径15mとなると思われる。すなわち隆起裾と考えられる

地点は、北側で傾斜が緩やかになる所でT.P.58.4m、東側で傾斜が緩やかになる所でT.P.57.2m、西側の幅2.0mの弧状にまわるような堀割が確認できる所でT.P.60.2mとなる。全体にT.P.58.0m前後のセンター

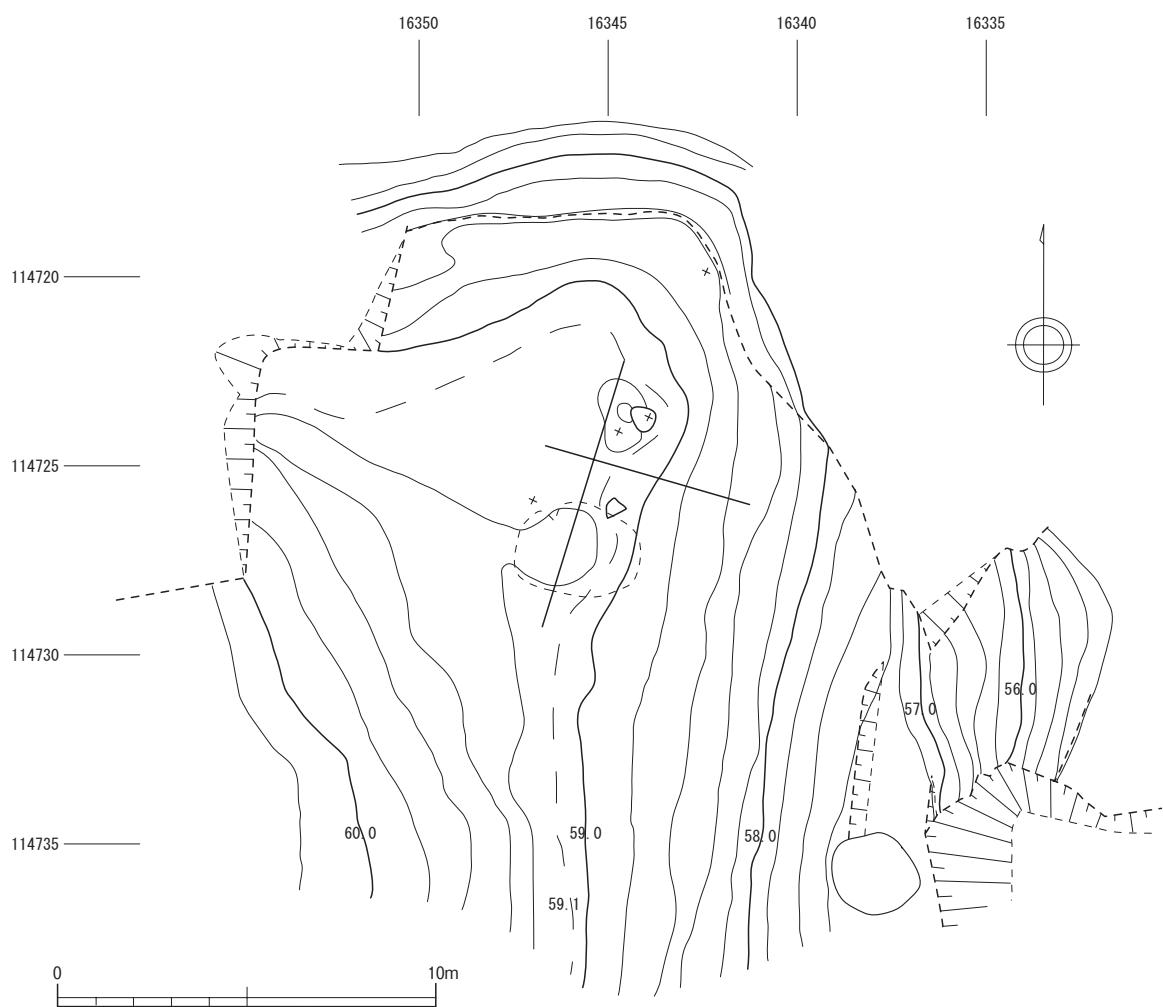


図10 向山古墳 墳丘測量図



写真16 向山古墳
墳丘北東側石群
(西より)



写真17 向山古墳 墳頂北東側石群
(西より)



写真18 向山古墳 墳頂南西側石群
(南より)



写真19 向山古墳 墳丘南側周溝
(南東より)

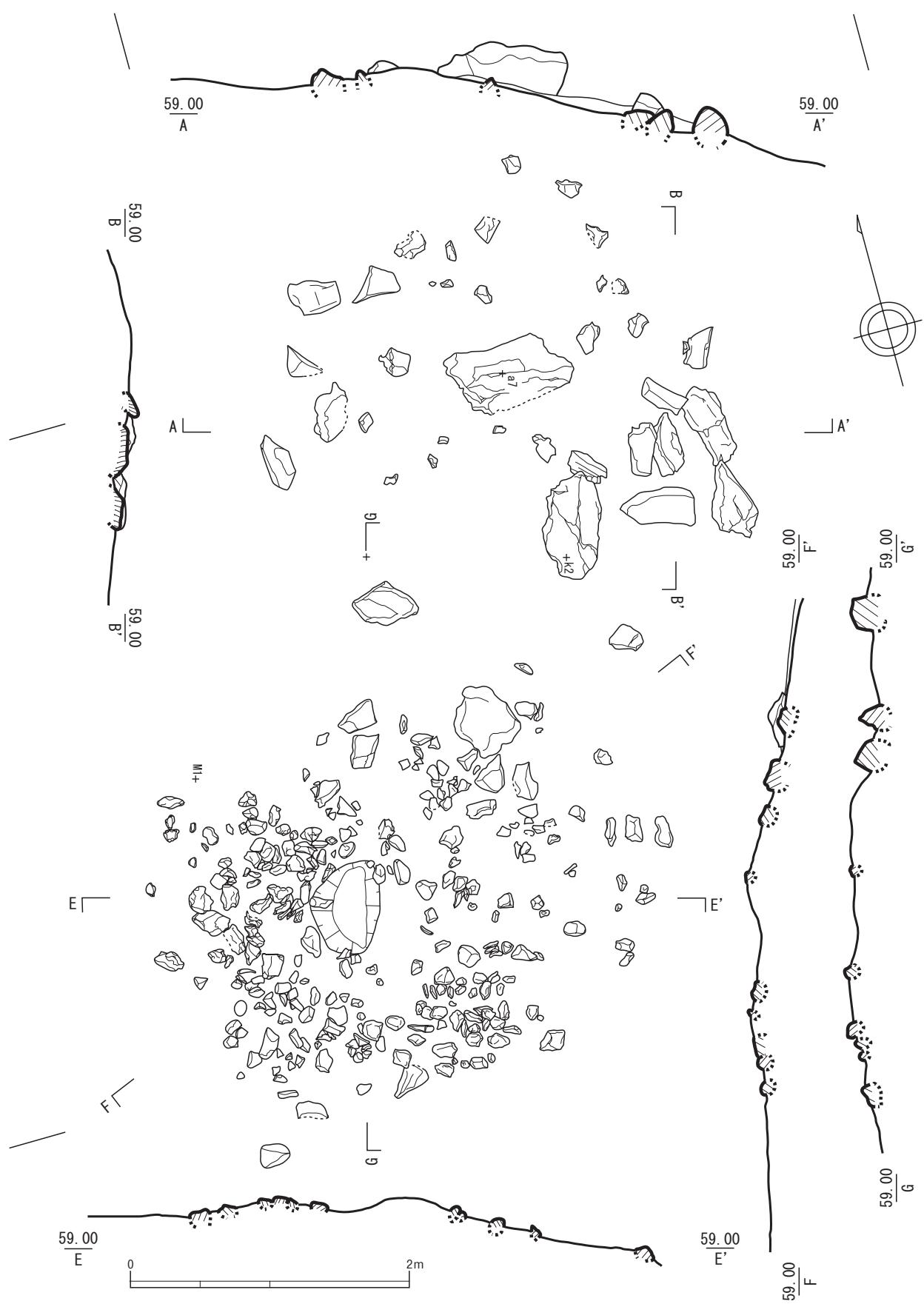


図11 向山古墳 石群検出状況

付近が裾になると考へる。そして中央、北東よりのT.P.59.347mを墳頂と考へると、低い位置にある東側の裾から考へると、高さ2.0mとなつた。

現状で墳頂部の中央には石が散らばつてゐる。北東と南西の2群に分かれている。これら石群の平面実測を縮尺1/20で行なつた。それぞれ使用石材と集まり方が異なる。北東側にある1群は細長い石が2.0mの範囲で、列をなしてゐるかに見える部分がある。径が20~60cmの石まで大小が散らばつてゐる。最も大きい石は長さ65cm、幅50cm、厚さ30cmを測り、この1群のほぼ中央に位置している。南から東の方向に、長さ50cm、幅25cmの長方形の石が2つ連なつてゐる状況で置かれており、この内側にも石が集中して置かれている。中央に向かうほど高くなつておき、低い平坦面から比べると総じて70cmほどの高さをもつ。この石の具合から、これら石の上にまだ石積みと、それに伴う土が盛り上がつてゐた可能性も考へ

られる。

一方、南西側にある石群の1群は拳石大ほどの小さな石が均等に径3.4mの範囲で環状に集まつてゐる。平均10cm強ほどの石がほとんどであり、北東側と比べると均質である。この石の中心は高くなり、高さT.P.59.28mである。これは他に中世以降の石造物に関連したものかと思われるが、この群は円墳の中心に位置してゐる。

4. おわりに

今年度の調査からは、向山古墳が円墳という積極的な確証は得られなかつた。調査範囲を広げるなどして、さらなる今後の調査が望まれる次第である。

注

(1・2) 京都橘大学考古学研究同好会『山科分布調査概報復刻版』2008年

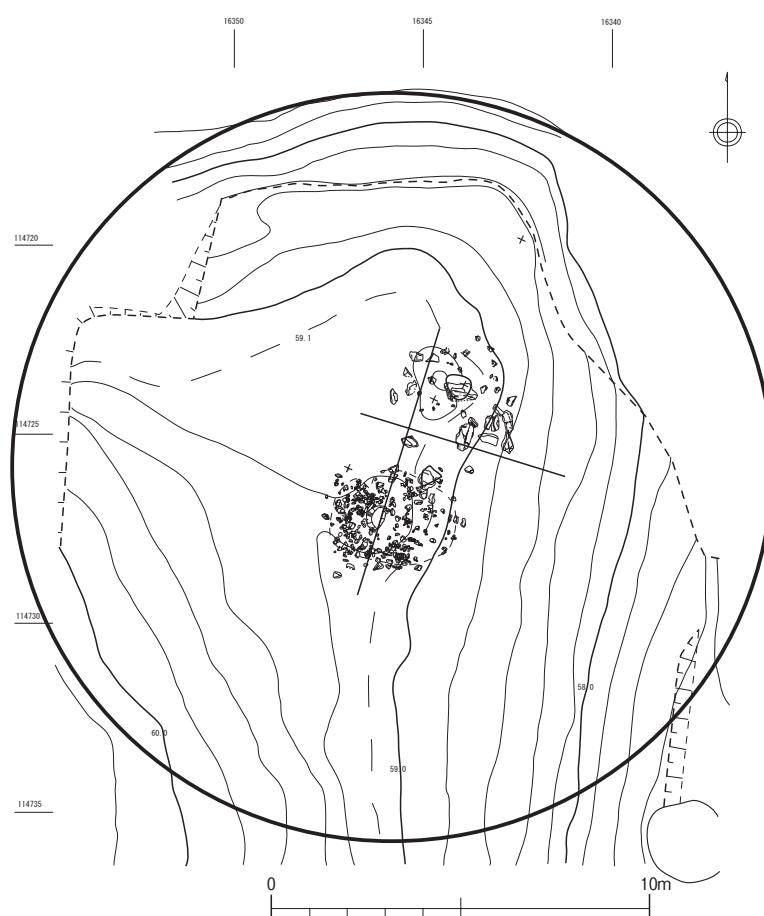


図12 向山古墳 墳丘状隆起の復元

第5章

大宅廃寺瓦窯跡地形測量調査 及び窯体実測

1. はじめに

大宅廃寺瓦窯跡は京都市山科区大宅に所在する。すでに知られる瓦窯跡として、南にある有段式窯窓で大宅廃寺の南約200mの丘陵麓に築かれたものと大宅廃寺の修復用のものが挙げられる。今年度の調査は昨年度に続く前者のもので、約23年間での窯体の変化を見るとともに現存する窯体以外にセットとなるものがないかを現状地形から確認する目的にしぼって行った。

2. 既往の調査

大宅廃寺の調査は、1919（大正8）年に西田直二郎氏が採集した遺物より平安時代と推定し『今昔物語』に見られる宮道彌益の妻の堂、いわゆる大宅寺であるしたことにはじまる（1）。一方、梅原末治氏は西田氏採集の瓦を奈良時代前期、すなわち飛鳥時代に遡らせ、中臣鎌足によって創建された興福寺の前身である山階寺にあてた（2）。そして1937（昭和12）年10月には木村捷三郎氏によって大宅廃寺瓦窯跡が確認された（3）。紀寺式軒丸瓦1点はそのころ収集したと考えられ、白鳳期のものである（4）。その後、付近から山階寺出土の軒丸瓦と同じ瓦が（5）、澤野井清一氏によって発見され山階寺の瓦を焼いた瓦窯となっている。これを受け田中重久氏は梅原氏の年代比定を支持し、山科の地により確実に山階寺とするものが発見されるまで、この地を山階寺とすることが妥当であるという見解を示した（6）。

その後、名神高速道路の予定地にある遺跡の事前調査の一環として第1次発掘調査が1958（昭和33）年に行われ、4棟の建物跡が南北に一直線に並ぶ伽藍であることが判明した。そして、平安時代後期まで大宅廃寺は存続した所見が得られた（7）。この調査結果については坪井清足氏が『佛教藝術』に報告をするとともに、決定的でないとしながら大宅廃寺を大宅寺とし、宮道彌益の妻が堂を建てたのは奈良時代に創建された大宅氏の氏寺の一部であったと解した（8）。また、その中で大宅廃寺内に大宅古墳が存在し、大宅廃寺建立の際、この古墳は破壊されずに残ったとする。この被葬者と大宅廃寺の関連性が注目される。

さらに大宅廃寺は1985（昭和60）年に、京都市立大宅中学校新設に伴い第2次発掘調査が行われた。白鳳期から平安時代前期にかけて大宅廃寺に関する遺構として築地の雨落溝と思われる遺構を検出した。平安時代中期以降は倉庫と考えられる総柱建物と掘立柱建物が台地全体に分布し、大宅廃寺の大規模な改変もしくは縮小が考えられている（9）。

大宅廃寺瓦窯跡は1976（昭和51）年、1981（昭和56）年、1982（昭和57）年に、橘女子大学考古学研究会によって踏査されている（10）。1976（昭和51）年は煙出しの部屋のみ残され、その前室は削り取られていたものと考えられる。その調査時には、煙出し部屋内に瓦片が多数残っていることが確認される。1981（昭和56）年には、高さ50cm、幅120～130cm、奥行100cmの煙出し部が残存していることを確認している。1982（昭和57）年には外見に大きな変化はないようだが、煙出し部に石が投げ込まれ、瓦片は見当たらないとする。

また2次調査と同じくして大宅廃寺瓦窯跡でも京都考古学研究会が地形測量を行っている（11）。その際には窯体の実測及び付近地形測量が行われた。報告では焼成部の後部は残存長約0.9mである。横断面プランはやや角ばった円形を呈し、幅約1.3m、高さ約1.2mであり平面プランは長楕円形と考えられる。傾斜角度は28～20°である。煙道（奥壁と呼ばれる部分も含む）は二重構造で、下方の径約37cm、上方は約25cmである。煙道口は、石がはめ込まれているのが窯内部からうかがえる。そして煙道は長さ約2m、高低差約1.5mであろう。傾斜角度は65～58°である。また、この調査では窯体内部の埋



図13 大宅廃寺関係 既往調査位置図

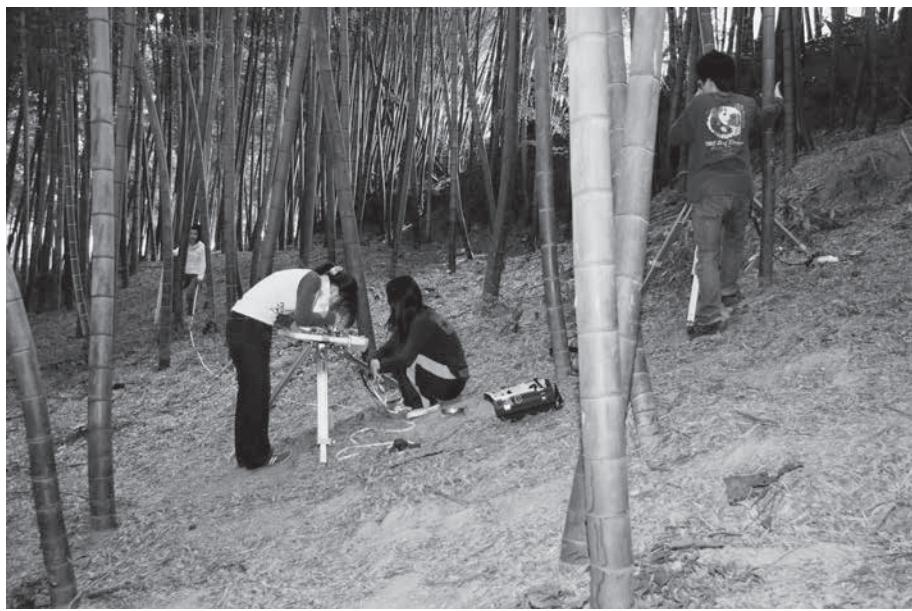


写真20 大宅廃寺瓦窯跡
南側斜面 調査風景（北より）



写真21 大宅廃寺瓦窯跡
窯体焼成部天井 煤付着状況
(東より)



写真22 大宅廃寺瓦窯跡
窯体焼成部後部（東より）

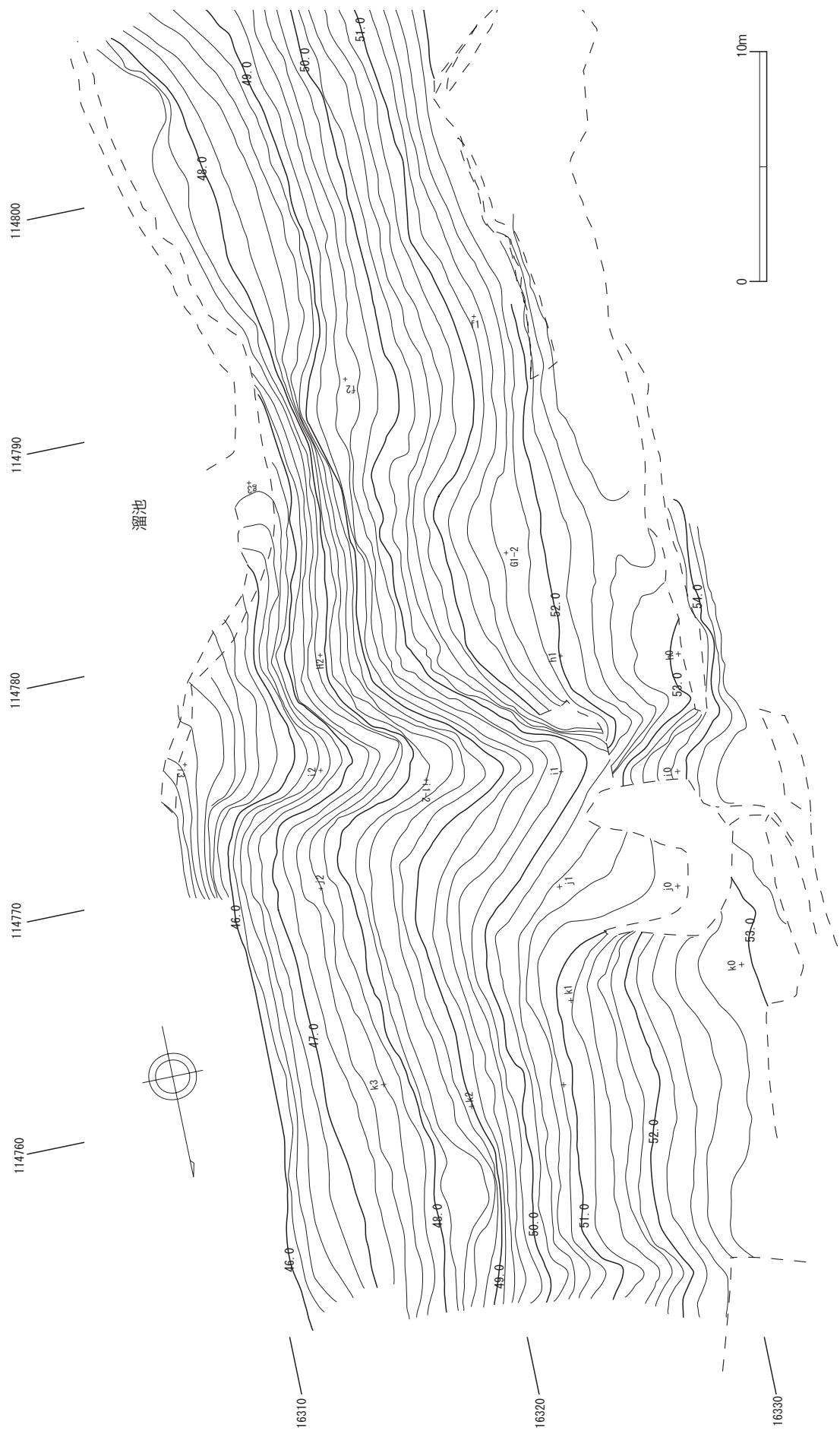


図14 大宅廢寺瓦窯跡 付近地形測量図

土を除去して層位が確認された。灰層（1～5cmの炭を含む）が厚さ5cm程堆積し、瓦片が数点のった状態で検出されている。灰層の下は焼土層（赤褐色粘土層）で厚さ約5cm、その下は地山（黄白色混礫土）と報告される。遺物も平瓦15片（内1片は調整不明）、丸瓦1片と判断不明の破片数片がある。この調査で付近地形測量が50cmコンターで行われる。

その後、1991（平成3）年度、京都市埋蔵文化財研究所による立会調査において大宅廃寺境内推定地からロストル式の平窯1基が検出される（12）。出土瓦の違いや窯を作り直したとみられる痕跡から、奈良時代後期に大宅廃寺を修復するために瓦を焼いたと推定される。

以上のように大宅廃寺と大宅廃寺境内瓦窯においては発掘調査が行われ、詳細が判明するが、大宅廃寺瓦窯に関しては京都考古学研究会が行った地形測量調査の50cmコンターの図と窯体実測図があるのみであった。そのため、昨年本学によって大宅廃寺瓦窯跡地形測量調査と窯体実測を行った。

今回の調査では前調査から約23年たった現在、窯体内部及び地形に変化があったのかを把握するとともに、地形を20cmコンターで測量することで、付近にセットとなるような窯体がないかといったことを検討することに重点を置いた。地形測量については標高53.20mから44.20mの範囲で終了し、窯体実測については平面図及び断面図を作成した結果、地形や窯体に前述の調査時点と現状では大きな改変はなく、以下のような所見が得られるに至った。

3. 調査概要及び所見

今年度の調査は、昨年度調査をした範囲から東西に広げて行うことでセットとなる他の窯体を探すことと、窯体実測の土に埋もれた部分の床面を探すことに重きを置いた。

昨年度の調査では基準点H1・H2を使用した。H1はX=-114777.124、Y=-16327.287、H=52.192である。H2はX=-114778.968、Y=-16317.148、H=47.986である。そしてH1とH2の山手にかけての直線上5.0mのところにH0を設定しHラインとした。このラインから北に5.0m間隔でI・Jラインを設定した。今年度の調査ではH2を使用せず、その他は昨年度のものを引き継ぎ使用した。さらに、昨年度よりも広い範囲を測量するため、新たに7点を追加した。

測量範囲は南北60m、東西24mとなった。窯体実測は

窯内部及び続く箇所の縦断面、横断面の実測を行った。

窯体残存部は焼成部と煙道部である。焼成部の残存長の奥行きは窯体内部縦断面図をもとにすれば約1.8mである。天井部から床面と思われるところまでの高さは最大約1.3mである。床面の傾斜角度は約25°となる。また、窯体内部の平面図によると最大幅約1.2m、平面プランは長方形を呈する。横断面はやや角ばった円形を呈す。

煙道部は窯体内部横断面図を元に二重構造で下方の入り口の径約37cm、下方から上方へ続く膨らみは最大幅約

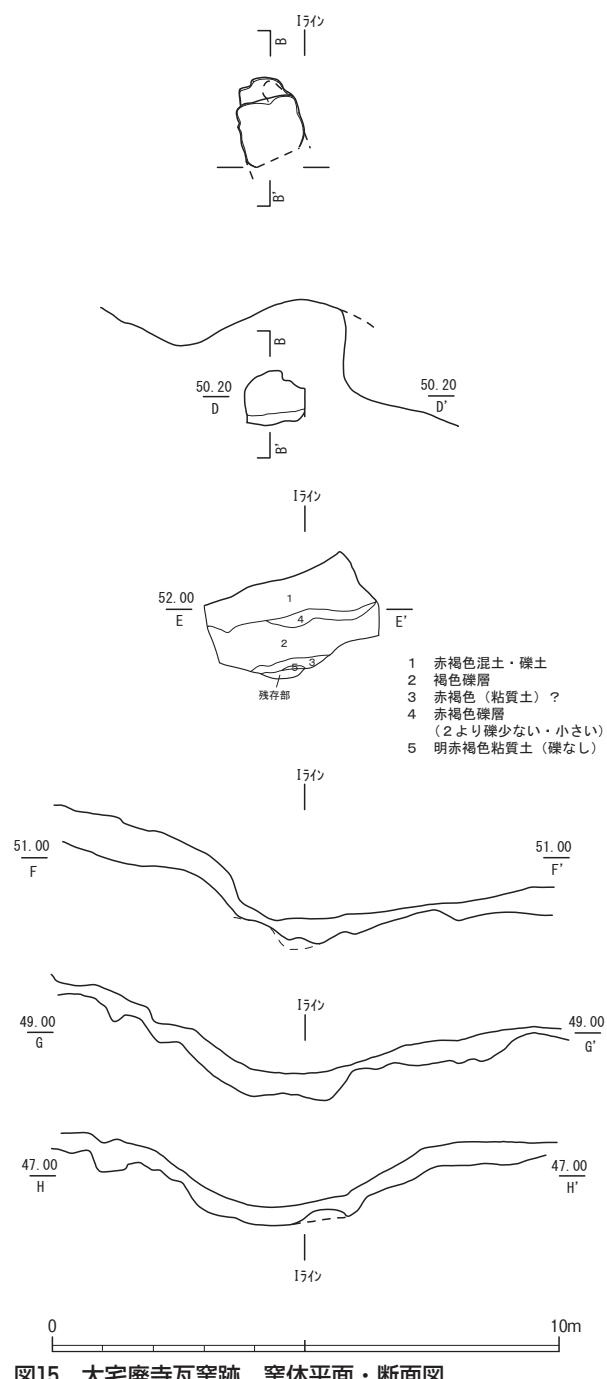


図15 大宅廃寺瓦窯跡 窯体平面・断面図

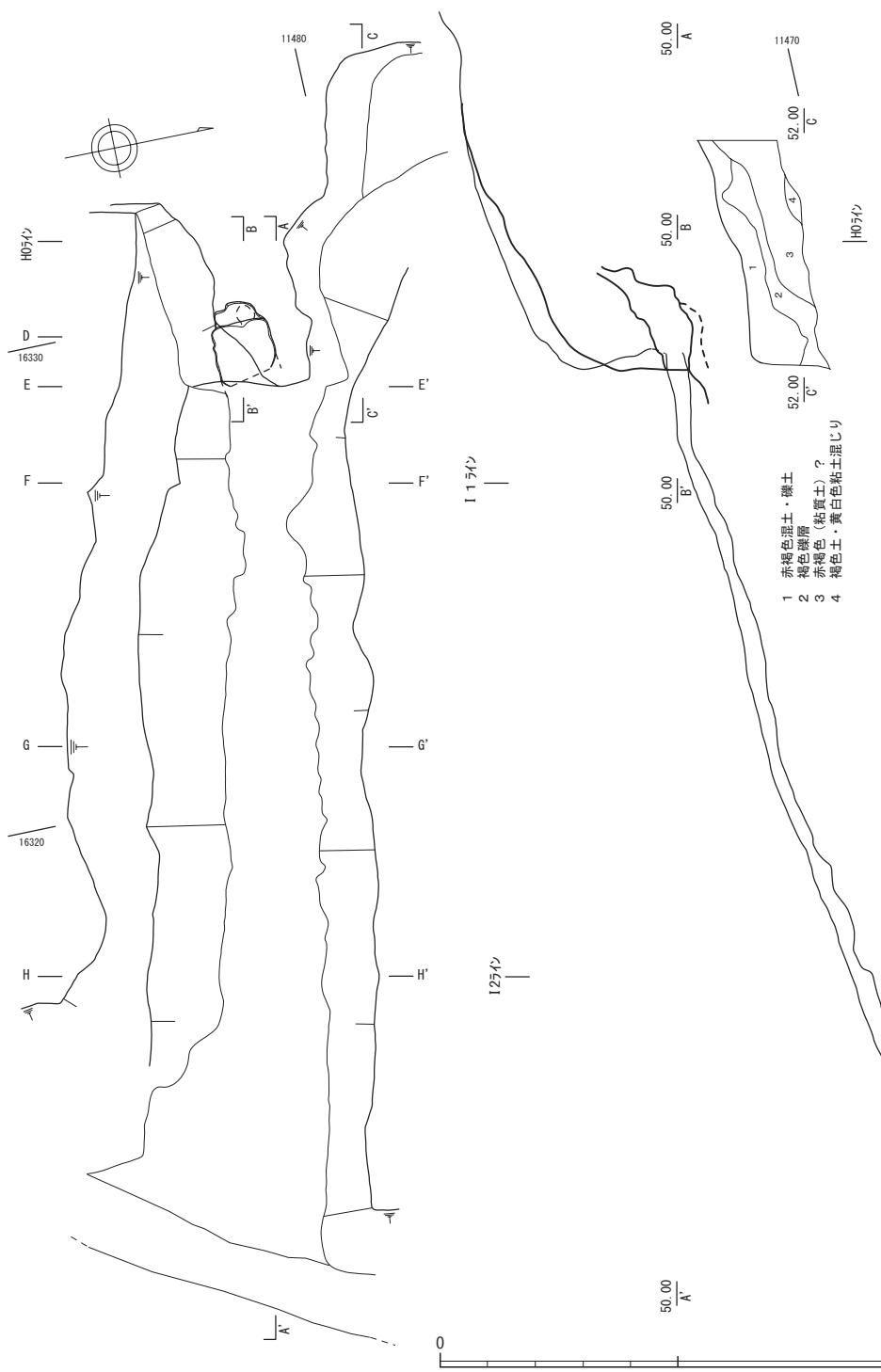


図16 大宅廢寺瓦窯跡 窯体平面・断面図

50cm、上方の入り口の径約25cm、煙道上部は径約18cmである。煙出し部には、昨年度は確認できなかった石がはめ込まれていることが窯内部から確認することができた。煙道部の長さは短くとも約2.6m以上はあると考えられる。また確認可能な残存部上部からの煙出し入口の高低差は約1.4mである。煙出し残存部の傾斜角度は約60°となる。

付近測量については後の所見に譲るが、全体的に竹林に覆われており竹の子栽培のため、かなり埋土は深いものと思われる。

窯体残存部から東に延びる階段状の窪みを窯体を考えていたが、今回、やや北に振れ、南側横断面の最深部が床面に当たっている可能性がある。残存部の奥壁からこの最深部を結んだものと平行移動して北側に復元したものを窯体の最小幅とすることができる。

のことにより窯体幅は最小でも約2.0mとなる。また、この最深部まで窯体があると考えると、長さは約14mと復元することができる。傾斜角度は、縦断面で実測を行った最深部を床面と考えると、18~20°と復元することができた。そして、全体を復元するとき、窯体を覆う範囲も考える必要がある。図15の点線は窪みに向かうラインであるが、これはかなりオリジナルに近いものと考えられる。南の崩落に関しては土地境界であり、またかなり激しく崩落しているため旧地形の影響とは考えづらい。このことから窯体外側を復元したとき、北側の崩落部分を外側のラインとすることができる。これらから推定される窯体の長さ約14.0m、幅2.0m、高さ約1.3m、煙道長約2.6m、径25cmとなる。

窯体を作る前の旧地形は今回の付近地形測量から図17のような位置を示し、今回実測を行った窯体はほぼ真ん

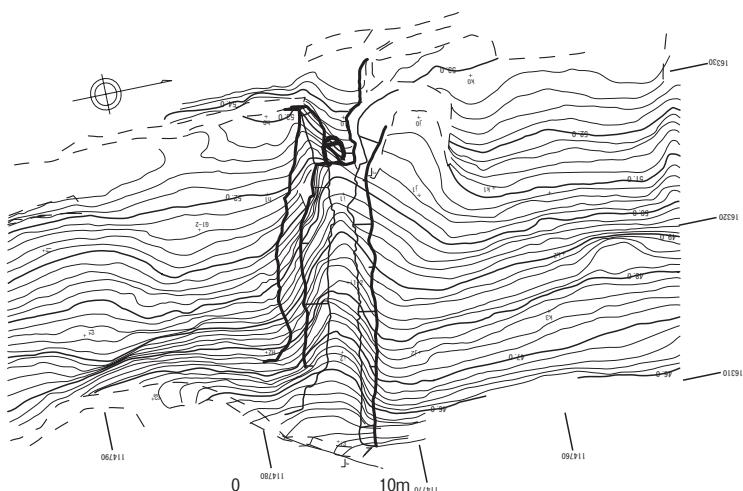


図17 大宅廃寺瓦窯跡付近地形と窯体陥没関係

中に位置することが分かる。またこの舌状の地形では異なる方向で窯を築くことは不可能なため、併行する方位と考えられる。この状況でセットとなる窯体がないかを考えて、窯体全体を配置できそうな箇所を見てみる。北に同方位に並べたとき杭J0付近は削られていて窯体がないことはすでに分かっている。そこを避けると旧丘陵の端に窯体はかかるてしまうため、北側にセットとなる窯体は無いと考えられる。また、南側は一段高くなっているが、旧丘陵の舌状張り出しがすぐにはじまるため、もう1基入るとは考えにくい。そのため、今回の所見からは大宅廃寺瓦窯については1基と考えることが妥当であると考えられるのである。

注

- (1) 西田直二郎「大宅寺址」『京都府史蹟勝地調査会報告』第1冊 京都府 1919年
- (2) 梅原末治「大宅寺址（補遺）」『京都府史蹟勝地調査会報告』第2冊 京都府 1920年
- (3) 近藤知子「大宅廃寺（同瓦窯跡を含む）」『木村捷三郎 収集瓦図録』京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- (4) 京都市所蔵
- (5) 京都大学文学部「大宅廃寺」『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第2部 1968年
- (6) 田中重久「平安京都前の寺跡と其の出土瓦」『夢殿論誌』18 鶴故郷舎 1938年
- (7) 有光教一・坪井清足「大宅廃寺の発掘調査概報」『名神高速道路路線地域内埋蔵文化財調査報告』京都府教育委員会 1959年
- (8) 坪井清足「大宅廃寺の発掘」『佛教藝術』37 每日新聞社 1958年
- (9) 平方幸雄・菅田 薫「大宅廃寺」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和60年度 京都市埋蔵文化財研究所 1988年
- (10) 京都橘大学考古学研究同好会「第5次山科分布調査遺跡台帳」『山科分布調査概報復刻版第1次~第5次』2008年
- (11) 京都考古学研究会『京都考古学研究会第11次分布調査概要』1985年
- (12) 竜子正彦・尾藤徳行「大宅廃寺・大宅遺跡」『京都市埋蔵文化財調査概要』平成3年度 京都市埋蔵文化財研究所 1995年

第6章

山科本願寺跡土壘測量調査

1. はじめに

山科本願寺跡土壘は山科区西野阿芸沢町に位置する。その一部は現在、山科中央公園内に整備されており、土壘と環濠の一部が残っている。2002年には「山科本願寺南殿跡付随本願寺土壘跡」として国史跡に指定された。その地点は土壘の中でも多くの機能をもち、北東隅の最も複雑なところにあたる。そこで公園の北東隅に残っている土壘構造の詳細を検討するために測量調査にとりかかった。

2. 山科本願寺と土壘

山科本願寺は、応仁の乱終結直後の1478（文明10）年に本願寺第8世の蓮如により建立が始まり、1483（文明15）年に完成した。以後、1533（天文2）年に大坂の石山本願寺が総本山になるまでの約50年の間、山科本願寺は浄土真宗の本寺となった。蓮如が本願寺の建立に山科を選んだ理由は、当時山科が東海道から宇治街道に抜ける交通の要所であり、山科川あるいは旧安祥寺川を利用して淀川に通じる水運の利用ができたからである。また、蓮如は京都にあった大谷退去以来の京都本願寺復帰の念願を果たすために、まずは山科の地に本願寺を建立したとも言われている。

山科本願寺は建立当時、寺よりも城と称されていた。本願寺の規模は、南北1km、東西0.8kmと大規模なものであり、これらの周囲は三重構造の土壘や堀に囲まれていた。その内部には一般住民なども居住する寺内町を有していた。このように土壘や堀を築いた寺域を囲ったのは、周囲との対立が激しくなっていったためである。また、北側の防御的意味の強い東海道への望楼の役目を果たすために土壘の規模を大きくし、さらにその上に、鼓楼や櫓を設けたりしていた。

山科本願寺は「御本寺」、「内寺内家中」、「外寺内」、の3つの区画に分けられている（図18）。これらにも土壘や堀が設けられており防御施設が充実している。ただし、これらの防御施設は蓮如没後に整備されたようである。このような防御施設が充実していたのは周囲との対立に激しさが増したためであった。そして、1532（天文元）年までに第11世証如指揮のもと多くの合戦に参加し

た。特に、興福寺や春日神社を襲撃した後は当時の権力者や京都市民たちは本願寺を警戒するようになった。すると本願寺が法華宗を攻撃する、という噂が流れた。そのため1532（天文元）年法華宗が蜂起し山科本願寺を攻撃した。このときの攻撃で山科本願寺は完全に焼失し、これ以後、本願寺の総本山は大坂石山本願寺へと移っていく。

3. 既往の調査

山科本願寺跡土壘についてはこれまで様々な調査研究がなされている。戦前には橋川 正氏により詳細な報告があり（1）、戦後には井口尚輔氏が、寺内町の区画を復元するために地上に残っている土壘と環濠を追跡している（2）。初めての考古学的な調査は、京都府教育庁による1962年の新幹線建設に伴うものであった（3）。その結果、遺構が良好に遺存していることがわかった。さらに、1973年から本格的な調査が市営住宅建設に伴つて山科寺内町遺跡調査団によって実施され、多くの遺構や遺物が出土し、全容解明の発掘調査の必要性が強く求められた。

1980年には橋女子大学考古学研究会により全体に及ぶ現状調査がなされている。この調査では山科中央公園内に残っている土壘の測量や建物跡、堀跡、石室などを確認している（4）。

それ以降、各所で継続的に発掘調査のみならず試掘・立会調査なども行われる。その結果、建物、石室、井戸、鍛冶場、溝など、寺域内の生活や生産活動に関連する施設の存在が明らかになった。また、土壘や堀、暗渠排水路の構造を確認することができることにより、山科本願寺が計画的に造営されていたことが明らかになった。

4. 調査の目的

今回調査した地点は、土壘の中でも、内寺内の北東隅にあたる部分で、L字形の土壘が東西約70m、南北約60mにわたって残っている（図19）。東北の隅はややくぼんでいて、入隅となっている。土壘の北側には、東西約40m、南北約20m、深さ約3mの落ち込みがあるが、これはプールとして使用されていた。もともとは堀跡の一部を拡幅してプールに転用したものと考えられている。多少の変更があるものの、公園内の北東隅は最も複雑な構造の部分にあたる。現在、国史跡の測量図があるが、さらに詳細に地形の状況を知ることで、その構造の細部の一端を解明し、山科本願寺の中でどのような役割を果



写真23 山科本願寺跡 土壘状況（左：北より、右：東より）

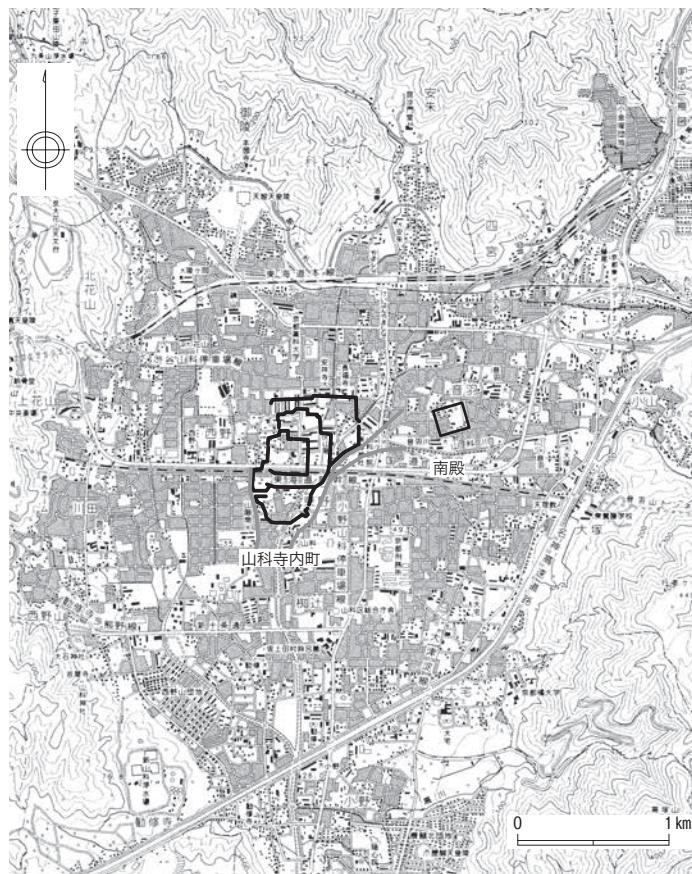


図18 山科本願寺跡・南殿跡位置図

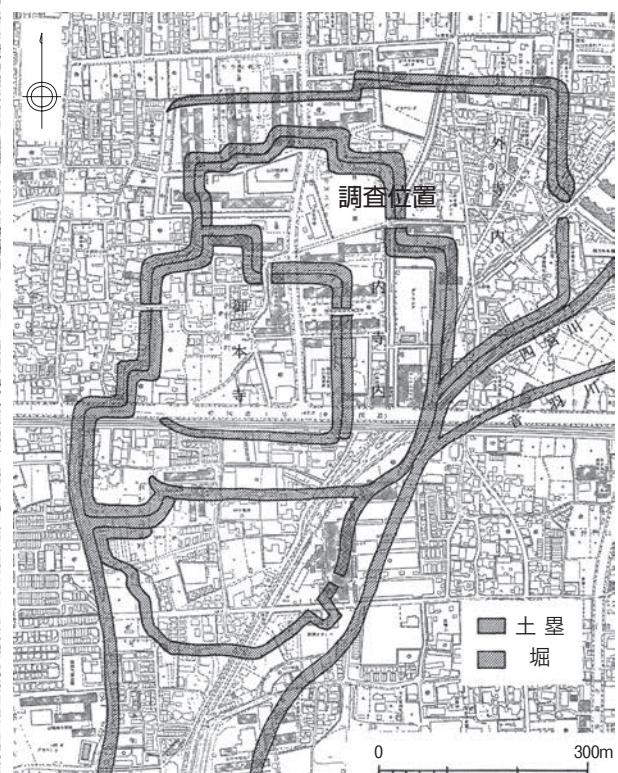


図19 山科寺内町（光照寺本）復原図と調査位置
（『国立歴史民俗博物館研究報告』1985より加筆）

たしたかについて他の土壘や遺構とともに検討するため、
25cmコンターで地形測量をとりかかることにした。

5. 今年度の調査内容

今回の調査では測量のためにポイントを18点、まず基準点を設置した。

西から東へ順に、YD-1、YD-2、YD-3、YD-4、
YD-5、YD-fを設けた。

YD-1は、X = -112638.783、Y = -17116.365。

YD-2は、X = -112624.317、Y = -17131.789。

YD-3は、X = -112632.214、Y = -17109.474。

YD-4は、X = -112621.957、Y = -17149.290。

YD-5は、X = -112626.071、Y = -17162.510。

YD-fは、X = -112638.034、Y = -17120.688。

第1次となった2009年12月22日から2010年1月6日まで行った調査では、山科中央公園の東北隅に残る南北60m、東西70mの土壘の上部南半分(南北15m×東西50m)の測量を完了した。全体の報告は来年度、継続調査後に行いたい。

6. おわりに

2010年度の調査では北側の土壘と、西側に認められるテラスや屈曲点にある方形壇の裾などを引き続き調査を行っていきたい。

注

- (1) 橋川 正「山科本願寺及其遺跡」『京都府史蹟勝地調査会報告』第17冊 1926年
- (2) 井口尚輔「中世城郭伽藍“山科本願寺”その他歴史的考察」『日本歴史』265号 1970年
- (3) 杉山信三・堤圭三郎ほか「山科本願寺跡」『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘報告書』1965年
- (4) 京都橘大学考古学研究同好会『山科分布調査概報復刻版 第1次～第5次』2008年

参考文献

岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」
『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 1985年



図20 山科寺内町土壘
(『国立歴史民俗博物館研究報告』1985より)

第7章

山科盆地における瓦窯の配置 －奈良・平安時代の集落・寺院と関連して－

1. はじめに

山科盆地は京都盆地のミニチュア版と言われることが多く、三方を山に囲まれ、南は宇治へと続く地形（1）となる。奈良時代以前の京都盆地は政治的にも立ち遅れ、それに接する山科盆地では特筆できるものが須恵器製作集団の居住区ぐらいであった（2）。しかし、667年の大津京遷都にともない、近江から大和へと続く現在の旧奈良街道にあたるルートの利用が高まり、山科盆地の重要性は増した。また、天智天皇陵が山科盆地の北方に築かれたことも注意すべき点である。

京都盆地では秦氏による北野廃寺がまず建立された。そこへ瓦を供給した北野廃寺瓦窯はこの近くに設けられた。山科盆地での瓦生産は大宅廃寺や小栗栖瓦窯跡出土瓦の白鳳期のものが早い。瓦に先行して須恵器窯が7世紀に営まれ、専用瓦窯へと変化する。また、京都盆地内では平安時代を契機とし窯窓から平窓へと移行していく。

山科盆地に所在する遺跡の文献は、平安京関連や近江関連が多い他、遺跡ごとで語られることが多い。山科盆地全体に言及したものには橋女子大学考古学研究会（3）や京都洛東ライオンズクラブ（4）など、その数は周辺地域と比べて圧倒的に少ない。前者は遺跡踏査を中心とした報告であり、1970年代後半から1980年代前半の各遺跡の現状が示される。後者は遺跡のみでは無く、神社など盆地に所在する各史跡を紹介する。瓦窯については、大川 清・坂詰秀一氏（5）のようにその形態や年代などに限定するものは少なく、多くの場合、瓦の流通や寺院などを含める。

そこで本稿では奈良・平安時代の山科盆地における集落・寺院をまず概観することからはじめ、その後に瓦窯について詳しく論じたい。

2. 山科盆地における諸遺跡

（1）集 落

山科盆地における主な古代集落は中臣遺跡・安朱遺跡・大塚遺跡が挙げられる。その中で最も活動が活発であったのは中臣遺跡である。山科川と旧安祥寺川が合流する地点から北に広がる通称「栗栖野丘陵」と呼ばれる

台地上に立地し、盆地のほぼ中央に位置する。縄文時代から活動を活発にはじめ、室町時代まで集落が確認され、長期間にわたる。特に、奈良・平安時代に関しては全地域の端々に遺構が確認され、奈良時代に明確に属するものは掘立柱建物のほかに柱穴や溝などがあり、遺跡の南を中心に存在する。平安時代のものは掘立柱建物のほかに溝や柵、土坑などがある（6）。

盆地北部の安朱遺跡は元来、安祥寺下寺推定地として確認された。その際には安祥寺下寺として報告されたが（7）、その後、字名より安朱遺跡と名づけられた。この遺跡で注目すべき点は、同盆地で確認された金銀背鏡・唐様太刀といった副葬品のある平安時代の墳墓である西野山古墓（8）にも見られる木炭木榔墓、平安時代前期の安朱古墓が検出されたことである（9）。

大塚遺跡は盆地北東部に位置し、京都市立音羽中学校での調査で竪穴住居跡4基・掘立柱建物2棟などが検出され、奈良時代の集落跡とされる。ただし、竪穴住居跡内から出土した轍・スラグ・焼土などから鉄鍛冶工房跡を含む可能性も指摘される（10）。

さて、盆地内にはその北半中央を占める山科本願寺跡があるが、この位置に奈良・平安時代の集落の有無について気になるところである。その付近には左義町遺跡という遺物散布地が確認されるものの、発掘調査などからは遺物がごく少量が出土するのみで遺構などはともなわない。四ノ宮・山科川の合流付近に大規模で安定した集落が営まれた可能性は低いと思われる。

（2）寺 院

山科盆地における主な古代寺院としては、安祥寺上寺・安祥寺下寺・元慶寺・大宅廃寺・勸修寺旧境内・大日寺跡・小野廃寺・醍醐寺子院・醍醐廃寺・法琳寺跡を挙げることができる。

まず、盆地北端にある安祥寺は、平安時代前期に仁明天皇（810～850年）の女御である藤原順子（809～871年）が発願し、入唐僧惠雲を開基として創建されるものである（11）。盆地北端の丘陵上にある上寺と盆地北端にある下寺のどちらが先に創建されたかは不明である。下寺推定地からは明確な遺構が検出されていないが、上寺は1951年に景山春樹氏らが踏査し、その存在を明らかにした（12）。その後、1978年に橋女子大学考古学研究会によって遺物とともに礎石が2つ確認される（13）。近年、京都大学などが中心に組織する第14研究会によって伽藍配置などが明らかにされた（14）。発掘調査が行われて

いないため遺物は少ないが、瓦は確認される。しかし、『資材帳』の一檜皮葺や一板葺などといった記載から建物のほとんどが檜皮葺や板葺と推定され、具体的な瓦の使用は不明瞭である。

盆地北西にある元慶寺は陽成天皇の誕生に際し、遍昭が発願、天皇の母藤原高子が877（元慶元）年に建立した定額寺である（15）。かつては、延喜式二十五大寺にも入ったが、応仁の乱で滅び、幕末に故地の付近に再興されて現在に至る。寺域などは不明である。

盆地東部にある大宅廃寺は数次にわたって発掘調査などが行われ、その知見と情報量が多い。西田直二郎氏は採集遺物より、いわゆる平安時代建立の大宅寺であるとした（16）。一方、梅原末治氏はこの採集瓦を飛鳥時代に遡らせ、中臣鎌足によって創建された興福寺の前身である山階寺にあてた（17）。田中重久氏は梅原氏の年代比定を支持した（18）。

その後、名神高速道路の予定地の第1次発掘調査が1958年に行われ、4棟の建物跡が南北に一直線に並んだ伽藍であることが判明した。そして、平安時代後期まで大宅廃寺は存続していたとの所見が得られた（19）。この調査結果より坪井清足氏は大宅廃寺を大宅寺とし、大宅氏の氏寺の一部であったと解した（20）。

1985（昭和60）年には、京都市立大宅中学校新設に伴い第2次発掘調査が行われた。白鳳期から平安時代前期にかけて大宅廃寺に関する遺構として築地の雨落溝と思われる遺構が検出された。平安時代中期以降は、倉庫と考えられる総柱建物と掘立柱建物が台地全体に分布し、大宅廃寺の大規模な改変もしくは縮小が考えられた（21）。

この調査後、平方幸雄氏は検出遺構を中心に伽藍の復元を試みるとともに、寺院の終焉頃の様相についての私見を提示した（22）。配置は金堂と塔の位置関係に基づく分類に従い「法起寺式」ないし「観世音寺式」を想定する。また、主要伽藍を囲む施設は築地塀を考え、しかもこれが講堂とした建物には取り付かず背面で閉じる可能性を考えた。そうであるならば、かなり特異な配置であると同時に、大宅廃寺の特徴となる。平安時代中期以降における掘立柱建物の規模の縮小、主要伽藍を囲む築地塀の廃棄などの状態から、この頃に主要堂塔を有する寺院としての機能（性格）は廃されることになる。ただし、かつての講堂に規模を縮小して堂が造作され、寺院としては細々と存続したことを指摘する。廃絶は平安時代末から余り時を経ないものとした。

山崎信二氏は、大宅廃寺の藤原宮式軒平瓦の中の1型式が藤原宮出土6644c型式と同範であることを指摘し、現資料の比較検討からその範型が大宅廃寺の瓦窯で製作され、藤原宮に供給するに及んで、範型が大和に移動して瓦が製作されたことを想定した（23）。

これに続く形で網伸也氏が今までの発掘調査をまとめ、瓦の範型を中心とした論を展開した（24）。7世紀第4四半期には北山背では大宅廃寺が中核的・拠点的寺院となって、大宅廃寺系列の工人集団が周辺寺院の造営に深く関与したと想定したことが、山崎論文によって証明されたとした。さらにこの中で、平方氏の伽藍復元案に対して、塔に関連する遺構や遺物が確認されていない段階ではその存在を想定するには難点が多いとする。

さて、盆地中央にある勧修寺旧境内は、現在の勧修寺より北方に広がる寺域が想定される。山科出身の宇治郡大領宮道弥益の邸宅としたと伝えられるが、905（延喜5）年には定額寺になるため（25）、それ以前の創建になる。1983（昭和58）年度の発掘調査では古墳～奈良時代頃とされる竪穴住居址、土坑、柱穴が検出され、これは中臣遺跡と関連すると考えられる（26）。1984（昭和59）年の試掘立会調査では土坑、溝などを検出し、土師皿や灰釉陶器などの資料を得ている（27）。

大日寺跡からは、盆地西にある醍醐天皇陵の北にある丘陵の南斜面に位置し、平安時代の綠釉蔵骨器（短頸壺）が出土する（28）。

小野廃寺は盆地東部にある。『器瓦録想』によると、1935（昭和10）年頃の現状は竹藪が開墾された畑地で地表に白鳳期と思われる平瓦小片の散布がある。（29）。

醍醐寺子院と醍醐廃寺は盆地南側にある。前者は1999（平成11）年の発掘調査によって、平安時代後期から鎌倉時代にかけての建物跡や築地跡が検出され、醍醐廃寺の子院跡に推定された（30）。津々池惣一氏による下醍醐全体の性格、敷地についての論考もある（31）。その後、2004（平成16）年に発掘調査が行われたが、攪乱がひどく当該時期の遺構は確認されなかった（32）。

醍醐廃寺は、現在の醍醐寺より西方に推定される（33）。1990（平成2）年及び1999（平成11）年度の調査では明確な遺構の検出はなかった（34・35）。しかし、1993（平成5）年の西接する調査区では、平安時代末から鎌倉時代にかけての建物、柱穴等の遺構が検出された（36）。さらに、1996（平成8）年度には現在の醍醐廃寺推定地が調査されたが、白鳳期の遺構そのものの検出はない（37）。1997（平成9）年度の調査では、前年度

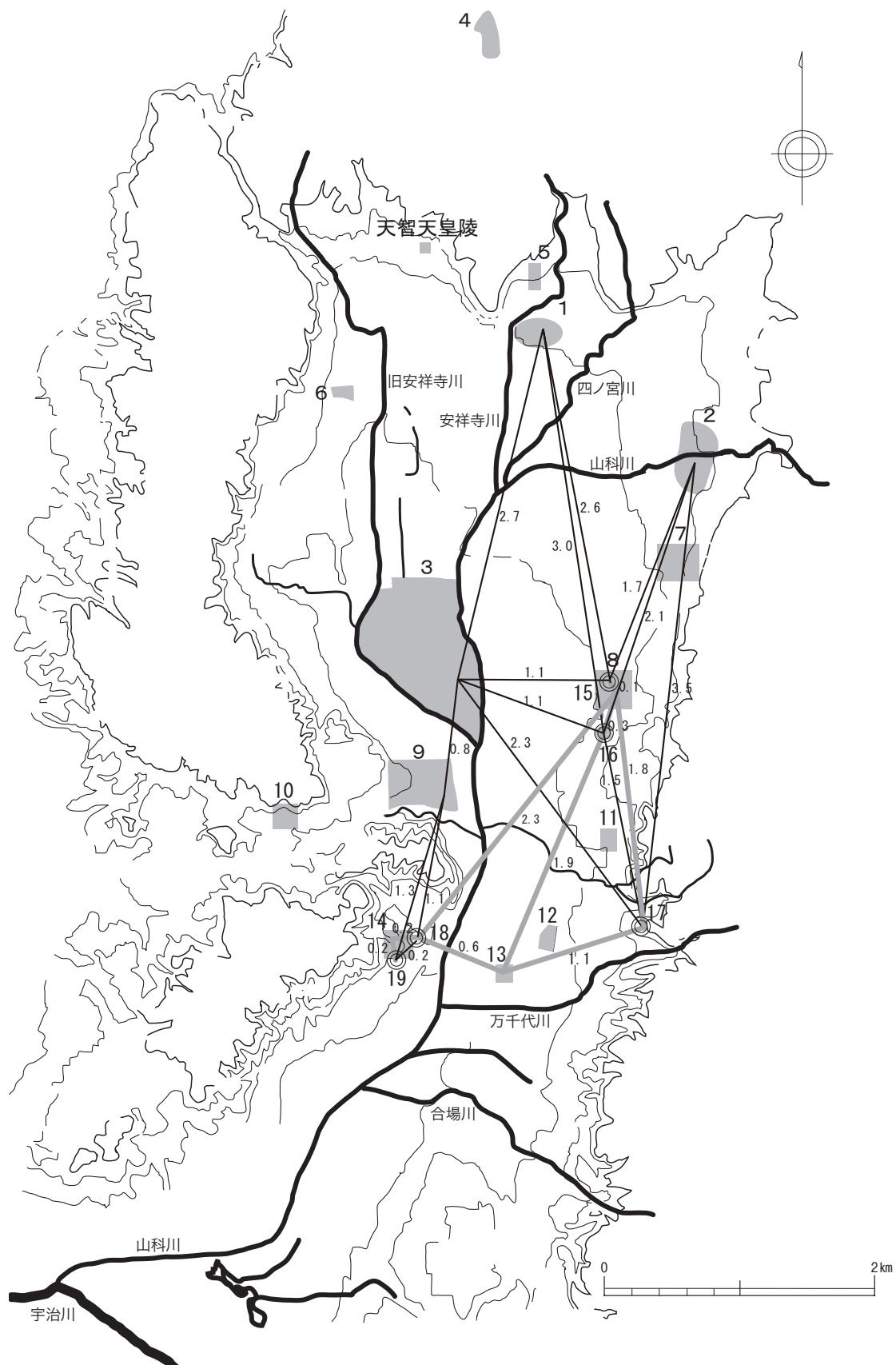


図21 山科盆地の瓦窯とその供給遺跡・寺院（表2の遺跡番号と共に）

の東側の低位段丘の調査が行われ、廃寺関連の平安時代前期頃の溝、柱列及び土取り穴などの遺構が検出された（38）。翌年度の調査では、それまで丘陵上を中心に寺域が推定されていたが、それより南に広がることが確認された（39）。醍醐廃寺推定地は攪乱が著しいが、どの調査においても瓦や土器といった遺物は出土する。

法琳寺跡は盆地の南西丘陵にあり、中臣鎌足の長子定惠によって三十塔・弥勒堂・薬師堂・太元堂などが創建されたとされる。このうち弥勒堂を弥勒菩薩本尊の金堂に、薬師堂を薬師如来本尊の講堂に比定して、地形より南面する四天王寺式の伽藍配置になると考えられた（40）。その後、本学が1999年に測量調査、2000年から2006年にかけて発掘調査を行い、礎石建物跡やロストル式瓦窯を確認した（41）。

（3）瓦 窯

山科盆地における主な古代瓦窯には、大宅廃寺瓦窯跡・大宅廃寺境内瓦窯跡・醍醐寺瓦窯跡・法琳寺瓦窯跡・小栗栖瓦窯跡がある。

山科盆地の東部に位置する大宅廃寺瓦窯跡は、大宅廃寺の南200mに位置する。1937（昭和12）年10月に木村捷三郎氏によって確認された有段式の窯窓であり（42）、前述の大宅廃寺に付随する瓦窯と考えられる。紀寺式軒丸瓦1点はそのころ採集されたものと考えられ、白鳳期のものである（43）。その後、付近から山階寺出土の軒丸瓦と同じ瓦が澤野井清一氏によって確認され（44）、山階寺の瓦を焼いた瓦窯となつた（45）。1976（昭和51）年、1981・2（昭和56・7）年には、本考古学研究会によって踏査されている（46）。1976（昭和51）年

表2 山科盆地瓦窯関連遺跡一覧

	遺跡名	縄文	弥生	古墳	飛鳥	白鳳	奈良	平安	鎌倉	室町
集落	1 安朱遺跡				○	○	○	○	○	○
	2 大塚遺跡						○	○		
	3 中臣遺跡	○	○	○	○	○	○	○	○	○
寺院	4 安祥寺上寺							○	○	
	5 安祥寺下寺							○		
	6 元慶寺						○			
	7 元屋敷廃寺					○	○			
	8 大宅廃寺				○	○	○			
	9 勸修寺旧境内						○			
	10 大日寺跡						○			
	11 小野廃寺					○				
	12 醍醐寺子院跡						○	○	○	
	13 醍醐廃寺				○	○	○	○	○	
	14 法琳寺跡				○	○	○	○	○	
	15 大宅廃寺境内瓦窯					○				
	16 大宅廃寺瓦窯跡				○					
	17 醍醐寺瓦窯跡					○	○			
	18 小栗栖瓦窯跡				○					
	19 法琳寺瓦窯跡						○			

には煙出し部のみ残され、その前室は削り取られ破壊、煙出し部内には多数の瓦片が確認される。1981（昭和56）年には高さ50cm、幅120～130cm、奥行100cmの煙出し部が残存。1982（昭和57）年は外見に大きな変化はないようだが、煙出し部に石が投げ込まれ、瓦片は見当たらないとする。その後、京都考古学研究会によって窯体の実測及び付近地形測量が行われ、遺物も平瓦15片（内1片は調整不明）、丸瓦1片他が報告される（47）。

そして2008（平成20）年、本学で測量調査を行い（48）、今年度引き続き調査した成果は第5章に挙げたとおりである。

一方、大宅廃寺境内瓦窯は大宅廃寺境内にあたる。1991（平成3）年度、京都市埋蔵文化財研究所による立会調査（49）においてロストル式の平窯1基が確認された。出土瓦の違いや窯を作り直したとみられる痕跡から考えて、奈良時代後期に大宅廃寺修復に伴って瓦を焼いたと推定される。

醍醐寺瓦窯跡は醍醐寺金堂北方に所在し、いつ確認されたかは不明である。1936（昭和11）年に木村捷三郎氏が平安時代後期の軒平瓦3点を採集する（50）。

小栗栖瓦窯跡は1929（昭和4）年、寺跡東側斜面の藪中で堂跡があるとは思えない急斜面に瓦片や灰が散布していたことから、木村氏はここに法琳寺創建窯があったと推定し、「天神山瓦屋」と命名した。これが小栗栖瓦窯になる（51）。その後、古代学協会が発掘調査を行い（52）、3基の地下式窯窓を検出し、法琳寺創建時の瓦窯と考えた（53）。

法琳寺瓦窯跡は法琳寺に付随する形で所在する。1936・7（昭和11・2）年に法琳寺域内にロストル式の平窯1基が確認された（54）。これは小栗栖瓦窯跡より時代が下るので修復時のものとした。これは梅原末治氏に報告され、京都大学考古学教室により発掘調査が行われた。その後、前述の調査が行われ、瓦窯も再掘され半地下式のロストル式の平窯であることが判明した（55）。

3. 山科盆地の古代遺跡間距離とその相互関係

（1）瓦窯と供給先及び集落との距離関係

ここでは山科盆地内での瓦窯の供給先である寺院との位置関係及び、その利用に深く関わったと思われる集落と相互の位置（56）を検討する。その際、瓦窯を中心と考え、確実に経由すると思われる遺跡以外は遺跡間の直線的な位置関係を見ていく。

大宅廃寺関係

まず、実態がわかる大宅廃寺瓦窯跡からはじめ。大宅廃寺との同範の軒丸瓦を伴い(57)、谷を挟んだ南方の丘陵状に築かれる。中央建物との直線距離は約0.3kmと短い。瓦窯跡から安朱遺跡は北方に位置し、直線距離は約3kmであるが小河川を隔てており、通常距離の倍の感覚となろう。大塚遺跡は北東に位置し、約20mの高台に所在し約2.1km。中臣遺跡は西方に位置し山科川を隔て約1.1kmとなる。

醍醐廃寺では同範の紀寺式軒丸瓦と重弧文軒平瓦が確認され(58)、瓦窯跡との関係性が考えられる(59)。醍醐廃寺は南方に位置し、小河川を隔て約1.9kmの位置となる。

大宅廃寺境内瓦窯跡は大宅廃寺のみ供給先が分かる。推定境内近くに位置するため、中央建物からは約0.1kmと至近距離であるものの、建物からは北西に位置し、伽藍よりも少し下った丘陵斜面に位置する。修復瓦を考えると境内瓦窯とはいえ、伽藍配置との区別を図ったことになる。境内瓦窯跡から、安朱遺跡や大塚遺跡、中臣遺跡はいずれも大宅廃寺瓦窯跡より近い。

先述の大宅廃寺瓦窯跡と境内瓦窯は、立地や出土瓦から大宅廃寺の付随施設と考える。

醍醐廃寺関係

醍醐寺瓦窯跡は現在の醍醐寺に近く、醍醐廃寺への供給と考えられる(60)。瓦窯跡から醍醐廃寺は西方約60mの低地にあり、約1.1kmを隔てる。ここから安朱遺跡へは、北方のいくつかの小河川を隔てて大宅廃寺瓦窯跡を経由して約4.5km。大塚遺跡は北方約20m低地で約3.5km。中臣遺跡は北西に位置し小河川および山科川を越えて約2.3km隔てる。

盆地南部に所在することから、いずれの主要遺跡からも1km以上外れる。

小栗栖瓦窯関係

小栗栖瓦窯跡の盆地内の供給先としては、同範の軒丸瓦などが出土する法琳寺跡(61)、製作地を小栗栖瓦窯とされる軒丸・軒平・丸瓦が出土する醍醐廃寺(62)、同じく軒平瓦が出土する大宅廃寺(63)とたいへん多い。

瓦窯から法琳寺跡は谷を隔てた向かいの丘陵上で約0.2km。醍醐廃寺は東南に山科川を隔て約0.6km。大宅廃寺は北東にあり、山科川と小河川を隔て約2.3kmである。中臣遺跡は北方に位置し、勧修寺旧境内を経由し、安祥寺川を隔て約2.1kmとなる。

これより距離が長くなり、北方の安朱遺跡へは勧修寺

旧境内と中臣遺跡を経由し山科川を隔て約4.8km。北東に大塚遺跡へは山科川を隔て大宅廃寺を経由し約4.6kmと離れる。

法琳寺瓦窯関係

小栗栖瓦窯跡は他寺院との関係もあるが、製作の中心は法琳寺創建瓦であり、その付隨施設となる。

法琳寺瓦窯は修復時の付隨施設であるため、そこからみた法琳寺は北方の約7mの高台に所在し、現在の推定境内に位置して、距離は約0.2kmとなる。盆地南端付近に位置するため、安朱遺跡には北方の勧修寺旧境内と中臣遺跡を経由し、安祥寺川・山科川を隔て約4.6km。大塚遺跡は北東に位置し、小栗栖瓦窯跡と大宅廃寺を経由し山科川を隔て約4.4kmとなって4kmをこえる。最も近い中臣遺跡は北方に旧勧修寺を経由し約1.9kmとなる。

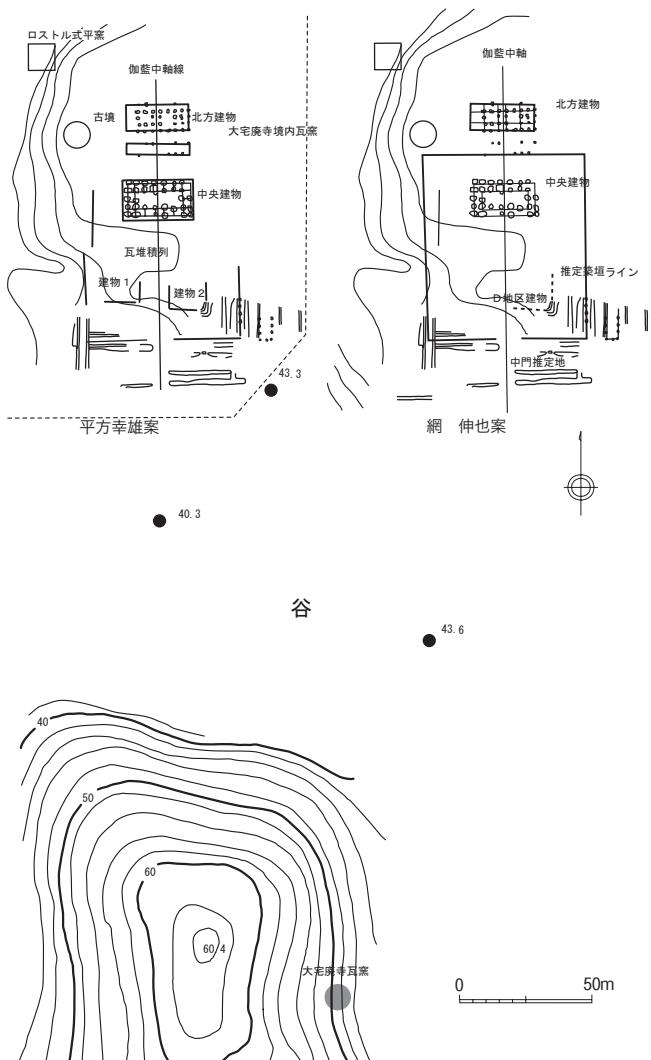


図22 大宅廃寺ユニット
(左上：平方復元案、右上・下：網復元案)

大宅廃寺ユニットと法琳寺ユニット

以上の位置関係で注目すべき点は、大宅廃寺と法琳寺における各々の創建瓦と修復瓦製作地の位置関係が類似することである。法琳寺については、建物が把握されるのみで伽藍配置を推定できないが、どちらも礎石建物が真北を向き、関連建物と考えてよい。また、創建瓦製作瓦窯については境内の近くとはいえ、どちらも谷を隔てた丘陵地に立地する。

このことは大規模に瓦を製作する際の資材調達などの環境を考えると、谷にある大量の水や粘土、なおかつ燃料である木材が入手容易な地点が好ましい。さらに創建時には窯窓が主流のため、窯本体の大きな土地を必要とした。規模のある生産地と寺院が一体となるユニットの類似性から、梶川敏夫氏が限られたスペースの中で展開する山岳寺院に法琳寺を含める（64）。しかし、法琳寺ユニットは山科盆地の中の遺跡では当時の主要交通路である宇治川に最も近い。むしろ、これより離れた山中にある安祥寺に山岳寺院としてのむしろ類似性を求めることができるであろう。同様な関係は、南滋賀町廃寺と近接する榎木原瓦窯の近接した親密なユニットに対して、一線画されて山中に存在する崇福寺跡といったものとの関係に似ていると言えよう（65）。

さらに、大宅廃寺と法琳寺関係を詳しくみると差異もある。それは小栗栖瓦窯は窯が3基そなわるのに対して、

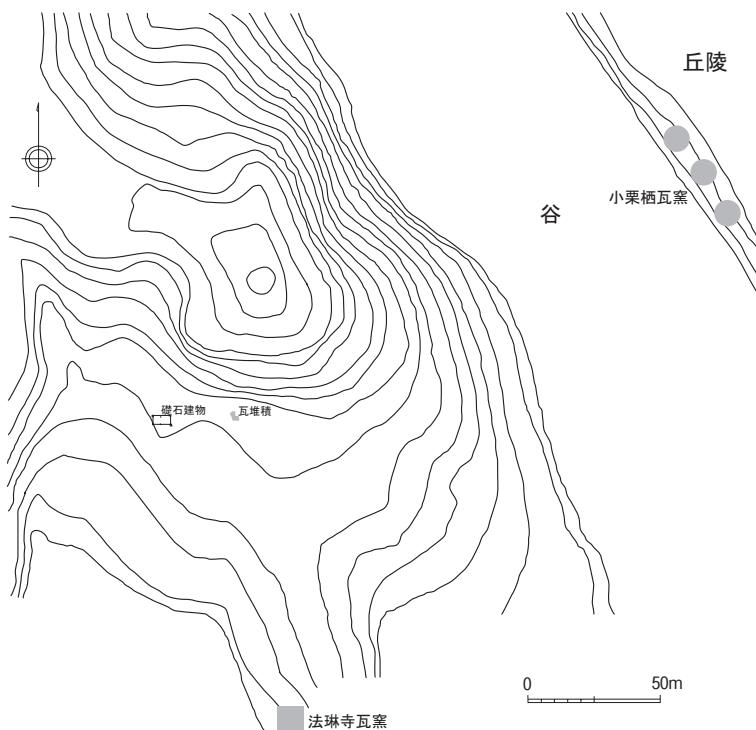


図23 法琳寺ユニット

第5章で見たように大宅廃寺瓦窯は1基のみであるということである。小栗栖瓦窯は法琳寺以外にも、大宅廃寺や醍醐廃寺の瓦製作地でもある。このことは各寺院の創建年代を考える手掛かりとなる。小栗栖瓦窯の窯経営期間中には、周囲の各寺院が瓦を必要とし、それらに供給するために経営規模は大きくなったとともに、そのことは各寺院建立に先駆けて展開していたことになり、山科盆地において中心的な役割を果たした初期瓦窯として位置づけることができる。

あらためて、小栗栖瓦窯と大宅廃寺間、醍醐廃寺間の距離を見ると、前者は2.3km、後者は0.6kmとなる。そして、小栗栖瓦窯に比べて、後に中心的役割を果たした大宅廃寺瓦窯跡は今のところ1基のみとなり、運搬距離も短い。

距離関係が短く、新しい時期のものに法琳寺瓦窯や大宅廃寺境内瓦窯がある。両者は境内に位置するといえども、その区画とは一線を画し、境内からは一歩下がった丘陵地に位置する。創建時には窯窓が使用されたにもかかわらず、修復時には平窯であったことでも両者は類似する。

瓦窯の中心となる供給先との最短距離が約300m以内にあるという至便性のあるこの距離は、一定の空間で生活する際には基本生活圏となる。その他の供給先は約2.3kmが最長となる。ただし瓦窯と各集落との距離はその倍の4.8kmとなることから、集落よりも窯と消費地でもある寺院とのネットワークが重視されたことになる。

そうした中で、中臣遺跡との各距離関係だけは最長でも約2.3kmであり、両瓦窯のほぼ中心になる。次節ではこうした集落と寺院との距離関係を詳しくみてみたい。

（2）集落と寺院との距離関係

集落は2km台の距離が遺跡ブロック単位の基準になりそうである。

安朱遺跡

まず、北側の安朱遺跡から見ていく。安祥寺下寺へは北方に約0.4km、元慶寺へは西方に約1.6km、元屋敷廃寺へは東南に約2.0km。安祥寺上寺へは北方に安祥寺下寺を経由で約2.1kmとなる。ここまで関係は2km前後におさまり、直接的である。これらは盆地北西端のブロックを形成していると言えよう。

寺院・瓦窯でも盆地の中心的な存在であった中臣遺跡へは南方に約2.7km離れる。大宅廃寺へは南方に約2.7km。勧修寺旧境内は南方に中臣遺跡を経て約3.5km、小野廃寺は南方に大宅廃寺を経て約3.8km、大日寺跡は南西に中臣遺跡を経て約4.3km、法琳寺跡は南方に中臣遺跡・勧修寺旧境内を経て約4.6kmである。醍醐寺子院跡は南方に大宅廃寺・小野廃寺を経て約4.7kmである。醍醐廃寺は南に位置し大宅廃寺・小野廃寺・醍醐寺子院跡を経由し約5.1kmとなる。

いずれも南方のものは、2.7kmの大宅廃寺・中臣遺跡の経由地をもって4km前後が多い。

大塚遺跡

同様の傾向は大塚遺跡にも見られる。元屋敷廃寺へは南に約0.7km、大宅廃寺へは南西に元屋敷廃寺を経て約1.8km、安祥寺下寺は北西に安朱遺跡を経て約1.9kmであり、2km前後がここまでである。盆地北東端ブロックになる。

さて、中臣遺跡へは約1.5km、大宅廃寺へは約1.8kmである。元慶寺は西方丘陵上に約2.7kmである。小野廃寺からは経由地を増していく。南方へ元屋敷廃寺・大宅廃寺を経て約2.9kmとなる。勧修寺旧境内は南西に中臣遺跡を経て約3.2km。安祥寺上寺は北西に約3.4km、醍醐寺子院跡は南方に元屋敷廃寺・大宅廃寺・小野廃寺を経て約3.8km、大日寺跡は山科川を隔て中臣遺跡経て約4.0km、醍醐廃寺は南西に元屋敷廃寺・大宅廃寺・小野廃寺・醍醐寺子院跡を経由し約4.2kmである。法琳寺跡へは南西に中臣遺跡・勧修寺旧境内を経て約4.3kmとなる。安朱遺跡に比べて、3km以上の位置関係が多い。

中臣遺跡

最後に盆地中央の中臣遺跡の位置を確認したい。

勧修寺旧境内は南方に約0.8km、大宅廃寺は東に約1.2km、大日寺跡は南西に約1.6km、小野廃寺は東南約1.6km、元屋敷廃寺は北東に約1.8kmとなる。

勧修寺旧境内経て行くものとして、法琳寺跡は南方に約1.9km、醍醐寺子院跡は約2.1km、醍醐廃寺は南に約2.2kmとなる。元慶寺は北西に約2.3kmとなり、これらはいずれも川や経由地を隔てているものの、みごとに2.0km前後以下という距離関係を示す。いかに中臣遺跡が盆地内において中心的な位置にあるのかが分かる。また、4.0kmをこえる各遺跡の経由地は中臣遺跡か大宅廃寺ということになる。

中臣遺跡から距離が開くのは北方の山中のものである。安祥寺下寺は安朱遺跡を経て約3.1kmであり、安祥寺上

寺はさらに北方へ約4.8kmである。これらは距離は長いが逆に川の流れを大いに利用できる。総じて、2.0km前後、徒歩30分圏内という至近距離及び、交通網的な結びつきが備わることになる。そして全方向にそれぞれ寺院が位置し、中臣遺跡を意識していたことがうかがえる。

加えて、それらの盆地北部の中継地の主要遺跡である安朱遺跡、大塚遺跡の存在もまた、後でふれる南方優位の時代における北方の中臣遺跡の川の上流にあることから、それがその影響下にあったであろう。

すなわち、中臣遺跡は古代集落の中にあって山科盆地で求心的な存在となり、各遺跡と相互に約2.7km圏内にあった。さらに、中臣遺跡から安祥寺上寺（66）・安祥寺下寺（67）以外の各寺院もまた約2.4km以内に位置し、各寺院の中心的位置でもあった。一方、各寺院は中臣遺跡より少し高台にあり、筆者が踏査した際の印象としては各寺院から中臣遺跡を望むことができると感じた。これは逆に中臣の集落の人々は各寺院の麓を目視できることがより強く確認できるのである。

さて、大宅廃寺と集落との距離関係で最も近いのは中臣遺跡である。また、直線距離の場合は経由したと考えられる遺跡はなく、大宅廃寺は中臣遺跡を意識して建立されたと言えよう。

醍醐廃寺から最も近いのは中臣遺跡であるが、その間に勧修寺旧境内を経由する。おそらく旧境内よりも先に醍醐廃寺は建立されていたが、勧修寺旧境内建立時に、醍醐廃寺と中臣遺跡との中継地点を意識する、もしくは前身にあたる何らかの施設が存在したことであろう。また、法琳寺は盆地内で最も早い段階で建立されたが、中臣遺跡と直線距離を引いたとき、勧修寺旧境内を経由する。

ともかく、これら山科盆地の早期建立寺院は、相互に約2km圏内を保ち、中臣遺跡を中心に建立されていたと考えることができる。

しかしその後、寺院が追加、建立されるにつれて、中臣遺跡のみを中心として発展するものではなく、寺院同士のつながりが次第に強くなったものと考えられる。各寺院は、盆地から他地域へ向かう行き先を意識した。たとえば、東の丘陵上に築かれたものは大津へ続く後に発展する奈良街道のルートを（68）、また西の丘陵上の寺院はさらに後の平安京へと続くルートといった具合である。

（3）宇治・八幡地区の諸遺跡との位置関係

さて、山科盆地の南に広がる奈良時代の大動脈主要交

通路であった宇治川、木津川に沿ったルートとの関係はいかなるものであったか。それらは交通路として栄えたであろうことを考慮し、盆地南に位置する接点であった宇治・八幡地区を今少し比較、検討してみたいと思う。

八幡地区的集落では内里八丁遺跡をはじめとした7遺跡があてはまる。宇治地区では西浦遺跡をはじめとした22遺跡である。八幡地区的寺院では志水廃寺・西山廃寺・美濃山廃寺があり、宇治地区では淨妙寺跡・觀音院本願寺跡・尊勝寺跡・岡本廃寺・大鳳寺跡・三室戸寺境内遺跡・三室戸寺子院跡・広野廃寺・白河金色院跡・カネツキ原廃寺である。

瓦窯跡については、八幡地区では樟葉平野山窯跡、西山廃寺に供給した西山瓦窯跡、志水瓦窯に供給した志水瓦窯跡があり、宇治地区には北山畠瓦窯跡・岡本廃寺境内に位置する岡本瓦窯跡、隼上り瓦窯跡、その他にも池山瓦窯跡、大鳳寺の創建瓦窯の山本瓦窯跡、広野廃寺の北に所在する瓦窯跡などがある。

ここで一部のものを区別したい。それは所在地域に瓦を供給しない樟葉平野山窯跡と隼上り瓦窯跡である。前者は瓦陶兼業窯で大阪市四天王寺の創建瓦を供給した。その距離はおよそ30km。また後者も瓦陶兼業窯であり、奈良県明日香村豊浦寺の創建瓦を供給する。その距離およそ50kmとなる(69)。このことは先述した寺院の長くとも5km以内という短い距離に瓦窯が作られることとは相反する。

この不自然な造瓦事例を考える上で重要なのが、遠隔地型瓦生産と屯倉制である(70)。上原真人氏は当時絶大な権力を握った蘇我氏によって瓦生産の拡大が行われたとする。というのは、7世紀前半の遠隔地型瓦生産地は、すべて『記紀』に記された天皇・皇族領地(=屯倉)所在地(71)、あるいは屯倉の近くにある中央に直結する水運の拠点近辺に立地(72)、中でもそのいくつかは上宮王家を含む蘇我氏が直接經營に関与したことが確認できるとするからである。一方、隼上り瓦窯についても豊浦寺専業窯のみに関わったのではなく、この窯の操業を契機に宇治一帯で窯業生産が一気に開始する。この2ヶ所の瓦窯には仏教拡大・造瓦技術拡大を意図的に遠隔地で進めた特殊な政策背景がある。こうした性格のものはいずれも山科盆地のものはもたないと考えられる。宇治・八幡地区にあるこれら2つの中央直結窯は宇治~山科の築窯に影響を与えたものの、地域内消費という観点からは別個のものとみなすことができる。

総じて宇治・八幡地区における集落遺跡は丘陵沿いに

築かれ、寺院はそうした集落の中に立地する傾向にある。八幡地区の寺院は集落より丘陵沿いに築かれるが、比較的集落に近い新田遺跡と美濃山廃寺との距離は約1.2kmである。それ以上に、集落と密接に建立されるのが宇治地区である。

菟道遺跡においてはその遺跡範囲の中に大鳳寺が建立される。創建瓦を供給した山本瓦窯跡は約800m南にある。広野廃寺も広野遺跡の中にあり、境内瓦窯もその範囲に含まれる。宇治地区で集落推定地に築かれるのは白川金色院跡とカネツキ原廃寺である。ただし、この2ヶ所ですら最長距離は1.6kmにすぎない。この関係は他より建立が遅れて平安時代に入ることから、宇治が藤原氏の別業として栄えたことと関係するように思われる。

瓦窯と寺院の関係では、八幡地区で志水廃寺がまず白鳳期に建立され、同時期の窯で寺院の近くに造られる。また、同時期建立の西山廃寺の西南にあるロストル式平窯の西山瓦窯は奈良時代であり、修復用となる。

一方、宇治地区ではまず北畠瓦窯があるが、古くから知られるわりに正確な場所は分からぬ。岡本廃寺は白鳳期創建である。伽藍配置は法隆寺式で、創建瓦も法隆寺西院式となる。講堂跡の西隣で検出した平窯状の残欠が岡本瓦窯跡である。先述の西山廃寺と同様に創建期瓦窯ではなく、奈良時代のものとされ修復用瓦である。

宇治地区的池山瓦窯跡は、隼上り瓦窯跡と同型の瓦を焼成した単独の窯らしく、煙出しと焼成部の一部が確認されるが、供給先は分からぬ。大鳳寺は白鳳期創建の寺跡で法起寺式伽藍配置を採用することが発掘調査により判明する。金堂瓦堂瓦積基壇が良く残り、寺域が土地区画に残る。そして、その創建瓦を供給したのが南約800mに位置する有階段式窯窓1基の山本瓦窯跡である。広野廃寺は中心伽藍は未発掘ではあるが、築地側溝が検出される。また、寺域北の一里山丘陵裾に瓦窯跡があり、創建期軒丸瓦を含む多くの瓦が出土したという。

以上の中には、大宅廃寺や法琳寺のように寺跡と創建瓦窯と修復用瓦窯がすべてそろう例は、宇治・八幡地区には見られない。しかし、瓦窯と寺院の距離を見ると、隼上り瓦窯からの距離を除くとすべて相互間0.2km以内に築かれる。これは山科盆地の大宅廃寺と大宅廃寺境内瓦窯、法琳寺と法琳寺瓦窯と類似する。加えて集落が先行した後に、そこに互いが重複するように寺院が築かれる。集落を中心として、そこに寺院が含まれる点で山科盆地とは類似するとは言えない。

4. 山科盆地の瓦窯と寺院の特質

山科盆地の瓦窯と寺院とは、宇治・八幡地区のものが集落内部に寺院が営まれる点が異なっていた。しかし、修復用の供給瓦窯については、寺院の境内近くに築かれ、平窯であるという類似性があった。その関係は法琳寺と大宅廃寺にもみて取ることができる。創建用供給瓦窯は境内と谷を挟んだ丘陵上に位置し、修復用瓦の方は境内の近くの斜面を利用した。

盆地各遺跡を直線で結ぶと、丘陵に沿って寺院は建立され、それに伴って瓦窯も築かれた。そして、基本的に中臣遺跡を中心に広がる。すなわち、古代の山科盆地は中臣遺跡を核に発展した。そしてそれは大宅廃寺と最も強いつながりをもっていた。

なぜなら、中臣遺跡では栗栖野丘陵東裾野においては大宅廃寺を望むように、奈良時代以前の大型掘立柱建物が建てられた(73)。また、初期寺院建立で最短距離を保つのは大宅廃寺である。網氏の指摘した中核寺院に当たはまり、それに伴う瓦窯もまた山科盆地内では中心となる瓦窯であった。

盆地内の寺院関係とその建立の特徴は、まず各寺院を最短距離で結ぶとほとんどが2km以内に位置することである。2km以上と不規則であるのは安祥寺上寺と元慶寺間・安祥寺下寺と元屋敷廃寺間・元慶寺と元屋敷廃寺間・元慶寺と大宅廃寺間・元慶寺と大日寺間にすぎない。

その距離には理由がありそうである。まず、安祥寺上寺と元屋敷廃寺間は直線距離にして約2.8kmである。しかし、この間には天智天皇陵が位置することが注意される。『延喜諸陵式』では14町四方の兆域が示され、それが奈良時代にも意識されていたとするならば、この間の寺院建立を避けたと考えられる。

安祥寺下寺と元屋敷廃寺間は直線距離にして約2.4kmである。この間には後の奈良街道が通っていたと思われる。そのため寺院を中間地点に寺院建立ができなかつたのか、街道沿いに集落が存在していた可能性もある。

元慶寺と元屋敷廃寺間の約2.8kmという直線距離ではあるが、向かい合う丘陵という地形的制約がある。また元慶寺と大宅廃寺間も同様である。

元慶寺と大日寺間は例外であり、最長の約3.2kmになる。多少の谷間を挟むものの、寺院は十分に立地と可能

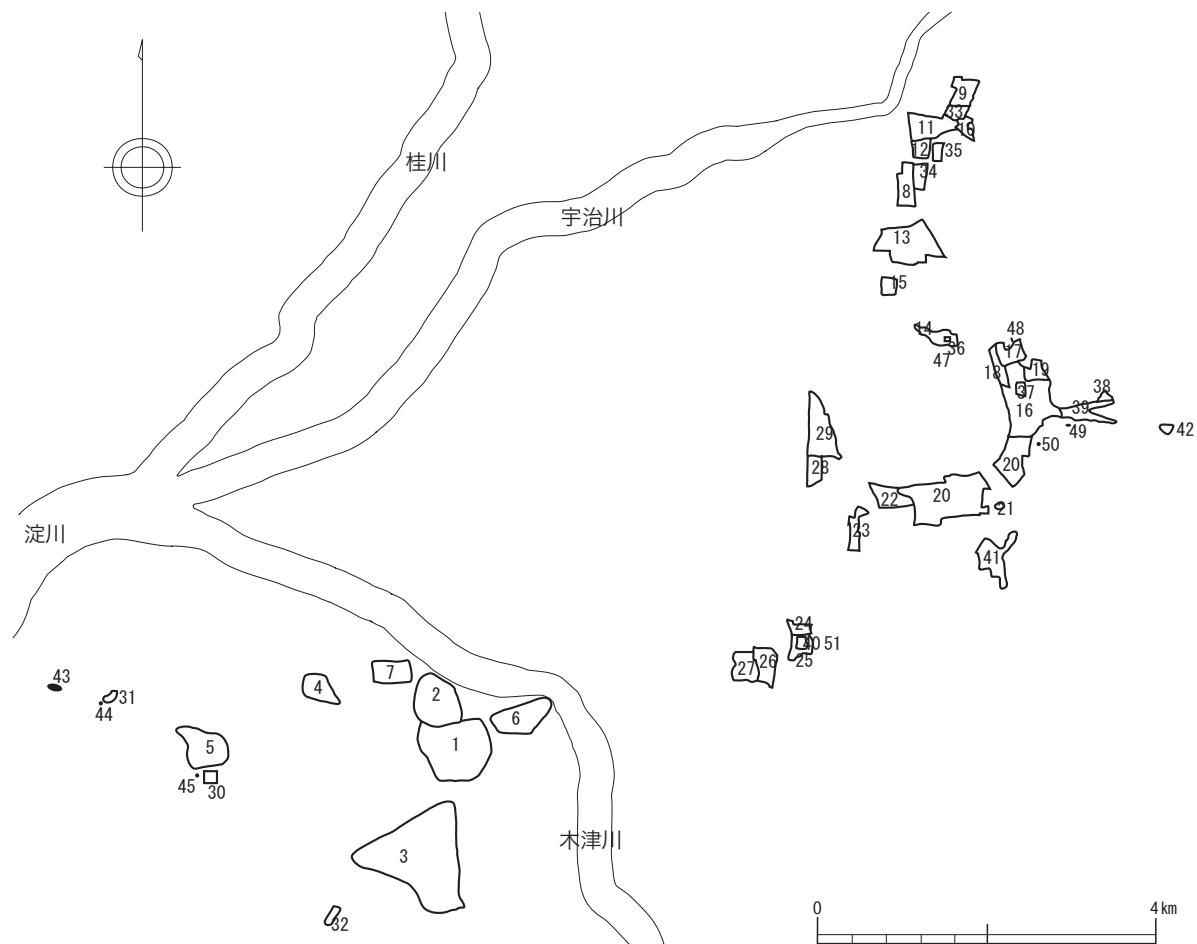


図24 宇治・八幡地区 瓦窯関連遺跡分布（表3の遺跡番号と共に）

なものとなっており、この中間に未知の寺院を想定することもできる。

しかし、ここで注目しておきたいのは西野山古墓である。この墳墓はちょうどその中に立地し、金銀背鏡・唐様太刀といった出土遺物がある(74)。この墓は平安時代につくられ、寺院建立期とも重なることから天智天皇陵のように寺院建立を避けたとも考えられるのではないだろうか。西野山古墓は「清水寺縁起」より坂上田村麻呂の墓と鳥居治夫氏は比定する(75)。

表3 宇治・八幡地区 瓦窯関連遺跡一覧

地区	遺跡番号	遺跡名	縄文	弥生	古墳	飛鳥	白鳳	奈良	平安	鎌倉	室町
八幡市	1	内里八丁遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○
	2	上奈良遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○
	3	新田遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○
	4	奥戸津遺跡				○	○	○	○	○	○
	5	女郎花遺跡		○	○	○	○				
	6	上津屋遺跡						○	○	○	○
	7	出垣内遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○
宇治市	8	西浦遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○
	9	赤塚遺跡						○	○	○	○
	10	金草原遺跡		○				○	○	○	○
	11	木幡遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○
	12	木幡東中遺跡						○	○	○	○
	13	寺界道遺跡	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	14	岡本遺跡			○	○	○	○	○	○	○
集落	15	尼ヶ塚遺跡					○				
	16	菟道遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○
	17	隼上り遺跡	○		○	○	○				
	18	西隼上り遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○
	19	東中遺跡					○				
	20	宇治市街遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○
	21	塔ノ川遺跡	○	○	○	○	○				
八幡市	22	矢落遺跡						○	○	○	○
	23	池森天神遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○
	24	一里山遺跡	○	○	○	○	○				
	25	広野遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○
	26	旦根遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○
	27	大久保環濠集落跡		○	○	○	○	○	○	○	○
	28	神楽田遺跡	○					○	○	○	○
宇治市	29	小倉遺跡	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	30	志水廃寺				○	○	○			
	31	西山廃寺				○	○	○	○	○	○
	32	美濃山廃寺				○					
	33	淨妙寺跡					○	○	○	○	○
	34	觀音院本願寺跡				○	○	○	○	○	○
	35	尊勝寺跡					○	○	○	○	○
寺院	36	岡本廃寺			○	○	○				
	37	大鳳寺跡		○	○	○	○				
	38	三室戸寺境内遺跡					○	○	○		
	39	三室戸寺子院跡						○	○	○	
	40	広野廃寺		○	○	○					
	41	白川金色院跡						○	○	○	
	42	カネツキ原廃寺						○	○	○	
瓦窯跡	43	樟葉平野山窯跡			○						
	44	西山瓦窯跡					○				
	45	志水瓦窯跡			○						
	46	北山烟瓦窯跡					○?				
	47	岡本瓦窯跡				○					
	48	隼上り瓦窯跡		○							
	49	池山瓦窯跡		○							
八幡市	50	山本瓦窯跡		○							
	51	広野廃寺境内瓦窯跡			○?						

以上のように2km以上のものを特殊事例とするならば、山科盆地の初期寺院建立は中臣遺跡を核として、早くに寺院建立を達成した宇治集団とつながる盆地南半部の優性の下での建立活動があった。その後は一定の寺院間距離を保ちながら、また後の街道を形成する原因ともなったのであろうが、それを意識しながら一定間隔を埋めるように建立が進んでいったと考えられる。

そうした寺院建立に伴った瓦窯は初期のものほど付属施設として一定の距離を保って創建瓦を供給し、補修の際には伽藍とは一線を画しながらも近くの丘陵面に設定され、展開したのであった。

註

- (1) 今回は便宜上、北を比叡山南部の如意ヶ嶽・大文字山、東を行者ヶ森・醍醐山、西を稻荷山・大岩山、南を醍醐廃寺跡とする。
- (2) 橋女子大学考古学研究会 2008 「第1次分布調査概報」『山科分布調査概報復刻版第1次～第5次』京都橘大学考古学研究同好会
- (3) 京都橘大学考古学研究同好会 2008 『山科分布調査概報復刻版第1次～第5次』
- (4) 京都洛東ライオンズクラブ 1976 『山科・醍醐』
- (5) 大川清・坂詰秀一 1967 「古代窯跡の形態」『考古学雑誌』52-4
- (6) 京都市埋蔵文化財研究所 1980 『中臣遺跡－文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』京都市文化観光局
京都市埋蔵文化財研究所 1981 『中臣遺跡発掘調査概要』昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査センター
京都市埋蔵文化財研究所 1982 『中臣遺跡発掘調査概要』昭和56年度 京都市文化観光局
京都市埋蔵文化財研究所 1985 『中臣遺跡発掘調査概報』昭和59年度 京都市文化観光局
平方幸雄 1987 「中臣遺跡・中臣十三塚、宮道古墳」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和59年度 京都市埋蔵文化財研究所
京都市埋蔵文化財研究所 1988 『中臣遺跡発掘調査概報』昭和62年度 京都市文化観光局
高橋潔・平方幸雄 1993 「中臣遺跡第70-1次調査」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和63年度 京都市埋蔵文化財研究所
高橋潔・平方幸雄 1995 「中臣遺跡第70-4次調査」『京都市埋蔵文化財調査概要』平成3年度 京都市埋蔵文化財研究所
内田好昭・高橋潔・平方幸雄 1996 「中臣遺跡73次調査」『京都市埋蔵文化財調査概要』平成6年度 京都市埋蔵文化財研究所
内田好昭・高橋潔・平方幸雄 1997 「中臣遺跡74次調査」『京都市埋蔵文化財調査概要』平成7年度 京都市埋蔵文化財研究所
内田好昭・高正龍・東洋一・堀内寛昭 2002 「中臣

- 遺跡79次調査』『京都市埋蔵文化財調査概要』平成11年度 京都市埋蔵文化財研究所
- 京都市埋蔵文化財研究所 2005 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2005-1 中臣遺跡
- 菅田薰 2006 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2006-8 中臣遺跡 京都市埋蔵文化財研究所
- (7) 高正龍・平方幸雄 1996 「安祥寺下寺跡1」『京都市埋蔵文化財調査概要』平成5年度 京都市埋蔵文化財研究所
- (8) 梅原末治 1920 「山科村西野山ノ墳墓ト其ノ發見ノ遺物」『京都府史蹟勝地調査会報告』第2冊 京都府
- (9) 高正龍・平方幸雄 1996 「安祥寺下寺跡1」『京都市埋蔵文化財調査概要』平成5年度 京都市埋蔵文化財研究所
- (10) 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 2007 『京都市遺跡地図台帳』【第8版】 京都市文化市民局
- (11) 京都市文化市民局文化部埋蔵文化財調査センター 2002 「安祥寺跡と木炭木櫛墓」『遺跡から見た京都の歴史』京都市文化財ブックス第16集 京都市文化市民局文化部文化財保護課
- (12) 景山春樹 1960 「安祥寺上寺址について」『日本古代史論叢』西田直二郎先生頌寿記念 古代学協会
- (13) 橘女子大学考古学研究会 1978 「第1次山科分布調査概報－山科の生産体制を明らかにする－」『山科分布調査概報復刻版第1次～第5次』京都橘大学考古学研究同好会
- (14) 梶川敏夫・上原真人・岩井俊平 2004 「安祥寺上寺跡の測量調査成果」『安祥寺の研究I』－京都市山科区所在の山林寺院－ 第14研究会「王権とモニュメント」
- (15) 京都市 1970 『平安の新京』京都の歴史1 学芸書林
- (16) 西田直二郎 1919 「大宅寺址」『京都府史蹟勝地調査会報告』第1冊 京都府
- (17) 梅原末治 1920 「大宅寺址（補遺）」『京都府史蹟勝地調査会報告』第2冊 京都府
- (18) 田中重久 1938 「平安寔都前の寺跡とその出土瓦」『夢殿論誌』18 鶴故郷舎
- (19) 有光教一・坪井清足 1959 「大宅廃寺の発掘調査概報」『名神高速道路路線地域内埋蔵文化財調査報告』京都府教育委員会
- (20) 坪井清足 1958 「大宅廃寺の発掘」『佛教藝術』37 毎日新聞社
- (21) 平方幸雄・菅田薰 1988 「大宅廃寺」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和60年度 京都市埋蔵文化財研究所
- (22) 平方幸雄 1993 「山背・大宅廃寺に関する二・三の問題」『平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集 杉山信三米寿記念論集刊行会
- (23) 山崎信二 1995 「藤原宮造瓦と藤原宮の時期の各地の造瓦」『文化財論叢』II 奈良文化財研究所編 同朋舎出版
- (24) 綱伸也 1999 「大宅廃寺再考」『瓦衣千年－森郁夫先生還暦記念論文集－』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
- (25) 百瀬正恒 1985 「勧修寺境内」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和58年度 京都市埋蔵文化財研究所
- (26) 百瀬正恒 1985 「勧修寺境内」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和58年度 京都市埋蔵文化財研究所
- (27) 京都市埋蔵文化財研究所 1985 「勧修寺境内」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度 京都市文化観光局
- (28) 京都市 1983 「大日廃寺」『考古』史料京都の歴史 第2巻 平凡社
- (29) 星野猷二・宇佐晋一 2004 「醍醐廃寺（小野廃寺）」『器瓦録想』伏見城研究会
- (30) 津々池惣一・布川豊治 2002 「醍醐廃寺」『京都市埋蔵文化財調査概要』平成11年度 京都市埋蔵文化財研究所
- (31) 津々池惣一 1999 「醍醐寺子院妙法院－その性格について－史跡醍醐寺境内の調査から－」『研究紀要』第5号 京都市埋蔵文化財研究所
津々池惣一 2000 「下醍醐－子院の敷地検討」『研究紀要』第6号 京都市埋蔵文化財研究所
津々池惣一 2001 「下醍醐－西方中山丘陵の子院等－市営醍醐東団地の調査から－」『研究紀要』第7号 京都市埋蔵文化財研究所
- (32) 吉村正親 2004 『醍醐寺子院跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-5 京都市埋蔵文化財研究所
- (33) 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 2007 『京都市遺跡地図台帳』【第8版】 京都市文化市民局
- (34) 高正龍 1994 「史跡醍醐寺境内」『京都市埋蔵文化財調査概要』平成2年度 京都市埋蔵文化財研究所
- (35) 津々池惣一・布川豊治 2002 「醍醐廃寺」『京都市埋蔵文化財調査概要』平成11年度 京都市埋蔵文化財研究所
- (36) 平方幸雄・丸川義広・高橋潔 1996 「史跡醍醐寺境内」『京都市埋蔵文化財調査概要』平成5年度 京都市埋蔵文化財研究所
- (37) 津々池惣一・内田好昭・丸川義広・能芝勉・布川豊治 1998 「醍醐廃寺」『京都市埋蔵文化財調査概要』平成8年度 京都市埋蔵文化財研究所
- (38) 内田好昭 1999 「醍醐廃寺」『京都市埋蔵文化財調査概要』平成9年度 京都市埋蔵文化財研究所
- (39) 吉本正親 1999 「醍醐廃寺」『京都市内遺跡立会調査概報』平成10年度 京都市文化市民局
- (40) 京都考古学研究会 1982 『小栗栖今昔物語』
- (41) 京都橘大学文学部 2007 『法琳寺跡発掘調査報告』
- (42) 近藤知子 1996 「大宅廃寺（同瓦窯跡を含む）」『木村捷三郎収集瓦図録』京都市埋蔵文化財研究所
- (43) 京都市所蔵
- (44) 京都大学文学部 1968 「大宅廃寺」『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第2部
- (45) 田中重久 1938 「平安寔都前の寺跡とその出土瓦」『夢殿論誌』18 鶴故郷舎
- (46) 京都橘大学考古学研究同好会 2008 「第5次山科分布調査遺跡台帳」『山科分布調査概報復刻版第1次～第5次』

- (47) 京都考古学研究会 1985 『京都考古学研究会第11次分布調査概要』
- (48) 松浦未春 2009 「大宅廃寺瓦窯跡」『京都橘大学文化財調査報告』2008 京都橘大学文学部
- (49) 竜子正彦・尾藤徳行 1995 「大宅廃寺・大宅遺跡」『京都市埋蔵文化財調査概要』平成3年度 京都市埋蔵文化財研究所
- (50) 卜田健司 1996 「醍醐寺」『木村捷三郎収集瓦図録』京都市埋蔵文化財研究所
- (51) 近藤知子 1996 「法琳寺跡（同瓦窯跡・小栗栖瓦窯跡を含む）」『木村捷三郎収集瓦図録』京都市埋蔵文化財研究所
- (52) 植山茂 1985 『小栗栖瓦窯跡発掘調査報告』古代学協会
- (53) 古代学協会 1984 『土車』32
- (54) 近藤知子 1996 「法琳寺跡（同瓦窯跡・小栗栖瓦窯跡を含む）」『木村捷三郎収集瓦図録』京都市埋蔵文化財研究所
- (55) 京都橘大学文学部 2007 『法琳寺跡発掘調査報告』
- (56) 距離を測る際には以下の項目を中心とする。
- A：未発掘、詳細不明の際には遺跡地図台帳【第8版】に従い推定値の中心を中心点とする。
- B：現在残る寺院場所、礎石建物跡を中心点とする。
- C：奈良時代・平安時代遺構検出地を中心点とする
(cf. 中臣遺跡)。
- (57) 近藤知子 1996 「大宅廃寺（同瓦窯跡を含む）」『木村捷三郎収集瓦図録』京都市埋蔵文化財研究所
- (58) 卜田健司 1996 「醍醐寺」『木村捷三郎収集瓦図録』京都市埋蔵文化財研究所
- (59) 同范瓦が出土しただけでは範型のみが移動したことも考えることができるが、その際には寺院同士または瓦工同士の関係性を見て取ることが可能なためここでは関係性のみを指摘することとする。
- (60) 橘女子大学考古学研究会 2008 「山科分布調査総括概報」『山科分布調査概報復刻版第1次～第5次』京都橘大学考古学研究同好会
- (61) 近藤知子 1996 「法琳寺跡（同瓦窯跡・小栗栖瓦窯跡を含む）」『木村捷三郎収集瓦図録』京都市埋蔵文化財研究所
- (62) 星野猷二・宇佐晋一 2004 「醍醐御靈廃寺」『器瓦録想』伏見城研究会
- (63) 星野猷二・宇佐晋一 2004 「大宅廃寺」『器瓦録想』伏見城研究会
- (64) 梶川敏夫 2002 「平安京周辺の山岳寺院（京都府）」『仏教芸術』265号 毎日新聞社
- (65) 小笠原好彦 1989 「近江古代寺院と分布」『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会
- (66) 安祥寺上寺は山岳寺院であり、人里離れた場所に建立するのが一般的なためここでは考察には入れない。しかし、かなり高い所に位置しているため集落からは確認可能であったと考えられる。
- (67) 安祥寺下寺は安朱遺跡を経由しているが、先述のとおりもともと安朱遺跡は安祥寺下寺推定地のため、安朱遺跡との関連のほうが強いと思われるため考察には入れない。しかし、安朱遺跡が中臣遺跡の影響を受けていると考察できるため二次的な関係がいえるのではないか。
- (68) 鳥居治夫 1973 「山城国宇治郡条理に関する考察」『近江』郷土史研究第1巻4号 近江考古学研究会
- (69) 宇治市教育委員会 1989 『史跡隼上り瓦窯跡』
- (70) 上原真人 2003 「初期瓦生産と屯倉制」『京都大学文学部研究紀要』第42号
- (71) 隼上り窯は深草屯倉である。
- (72) 樺葉平野山窯は茨田屯倉推定地近辺に所在する。
- (73) 京都市埋蔵文化財研究所 1979 『中臣遺跡』－建設省国庫補助事業による発掘調査の概要－1978年度
- (74) 梅原末治 1920 「山科村西野山ノ墳墓ト其ノ發見ノ遺物」『京都府史蹟勝地調査会報告』第2冊 京都府
- (75) 鳥居治夫 1973 「山城国宇治郡条理に関する考察」『近江』第1巻第4号 近江考古学研究会

報告書抄録

ふりがな	きょうとたちばなだいがく ぶんかざいちょうさほうこく							
書名	京都橋大学 文化財調査報告 2009							
副書名	牧野車塚古墳・禁野車塚古墳・向山古墳・大宅廢寺瓦窯跡・山科本願寺跡							
卷次								
シリーズ名	京都橋大学 文化財調査報告							
シリーズ番号	3							
編著者名	一瀬和夫 堂ノ本智子 三井 彩 松井綾子 坂本聰美 松浦未春 山崎美輪							
編集機関	京都橋大学 文学部文化財学科							
所在地	〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34 TEL. 075-571-1111							
発行年月日	2010年3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	コ ード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
牧野車塚古墳	大阪府枚方市車塚	27210	141	34° 83' 38" " " "	135° 66' 9" " " "	2009年8月3日～ 2009年8月12日、 2009年10月10日、 2009年10月11日	2411m ²	学術調査
禁野車塚古墳	大阪府枚方市宮之阪 5丁目	27210	152	34° 48' 38" " " "	135° 39' 26"	2009年7月11日、 2009年7月12日、 2009年7月30日、 2009年7月31日、 2009年10月10日、 2009年10月11日	435m ²	学術調査
向山古墳	京都府京都市山科区 大宅向山	26100	636	34° 57' 57" " " "	135° 49' 15"	2009年8月17日～ 2009年8月28日	598m ²	学術調査
大宅廢寺瓦窯跡	京都府京都市山科区 大宅向山	26100	637	34° 57' 55" " " "	135° 49' 17"	2009年8月17日～ 2009年8月28日	1440m ²	学術調査
山科本願寺跡	京都府京都市山科区 西野阿芸沢町	26100	626	34° 59' 05" " " "	135° 48' 45"	2009年12月22日～ 2010年1月6日	750m ²	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
牧野車塚古墳	古墳	古墳時代	前方後円墳 渡土堤 6ヶ所 段差 3ヶ所	土師器片 須恵器片 埴輪片	(測量調査) 墳丘長 107.5m 後円部 径58m 前方部 幅45m
禁野車塚古墳	古墳	古墳時代	前方後円墳 方形壇	土師器片 埴輪片	(測量調査) 墳丘長 120m 後円部 径63m 前方部 幅55m
向山古墳	古墳	古墳時代	円墳状隆起 北東石群 南西石群	—	(測量調査) 円墳状隆起 径15m、 高さ2.0m 北東石群 径2.0m、 0.7m 南西石群 径3.4m、 高さ0.4m
大宅廃寺瓦窯跡	瓦窯跡	白鳳時代	瓦窯	—	(測量調査) 窯体 長さ14m、 幅2.0m 高さ1.3m 煙道 長さ2.6m 径0.25m
山科本願寺跡	寺院跡	室町時代	土壘	—	(測量調査) 残存長さ東西70m、 南北60m 土壘 幅15m 高さ8.5m 堀 幅18.4m

京都橘大学 文化財調査報告 2009
牧野車塚古墳・禁野車塚古墳・向山古墳・大宅廃寺瓦窯跡・山科本願寺跡

発行 京都橘大学 文学部

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34 TEL 075-571-1111

発行日 2010年3月31日

印 刷 (有)真陽社

〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺下ル TEL 075-351-6034



京都橘大学

KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY